

代序辭

(兩本山貫首告諭取要)

大日本帝國憲法第廿八條に曰く「日本臣民は安寧秩序を維持し及ひ臣民たるの義務に背かざる限に於て信教の自由を有す」と伯爵伊藤博文君之を解して謂く中古西歐宗教の盛なる之を内外の政事に混用を以て流血の禍を致し而して東方諸國は又嚴法峻刑を以て之を防禁せんと試みたりしに四百年來信教自由の説始めて萌芽を以て佛國の革命北米の獨立に至り公然の宣告を得漸次に各國の見認する所となり現在各國政府は或は其國教を存し或は社會の組織又は教育に於て仍一派の宗教に偏袒するに拘はらず法律上一般に各人に對し信教の自由を與へざるはあらず而も本異宗の人を戮辱し或は公權私權の享受に向て差別を設くるの陋習は既に史乘過去の事として(獨逸各邦に向ては千八百四十八年迄仍猶太教徒に向て政權を予へざりし)復其跡を留めざ



るふ至れり此の信教の自由は之を近世文明の一大美果として看  
るを得可く而して人類の尤も至貴至重なる本心の自由と正理  
の伸長は數百年間沈淪茫昧の境界を経過して纔に光輝を發揚す  
るの今日に達したり蓋し本心の自由は人の内部に存する者にし  
て固より國法の干渉する區域の外に在り而して國教を以て偏信  
を強ふするは尤も人智自然の發達と學術競進の運歩を障害する  
者にして何れの國も政治上の威權を用ゐて以て教門無形の信依  
を制壓せんとするの權利と機能とを有せざる可し本條は實に維  
新以來執る所の針路に従ひ各人無形の權利に向て濶大の進路を  
手へたるあり

以上は憲法の明文義解の詳説にして苟も宗教に従事する者は心  
の鑿め肝に銘して教界の範圍を擴張せざる可らず憲法の實施は  
方に近きに在り國家の盛事指を屈して待つの日に當り宗教に従

事する者未だ以て信教自由の結果如何を遠く慮からざる者ある  
か如し夫れ順境に對する時は日本臣民たる者日本帝國の安寧を  
冀圖して秩序を紊亂せず國家に盡す可きの義務を確守す可きは  
風癩白痴を除く外誰か之を遺忘する者あらんや然とも僅に逆境  
に臨む時は心猿意馬先つ狂奔して良心を壓抑す是に於て眞理の  
所在を甄究するの遑なく或は名譽の奴隸と爲り或は利養の先驅  
と爲る遂に彼處に競争し此處に黨比して知らず秩序を破壊し義  
務に背くに至らんとするは人情の常にして數の免れざる所なり  
顧ふに兩本山は明治五年に始めて數十年來の諍鬪を停め爾後は  
偏に兩本山の軋轢を協和するに注意して明治十二年に盟約を結  
ひ明治十四年に憲章を定め明治十八年に宗制を編製して茲に漸  
く一宗一體の組織を堅めたり然れども尙ほ未だ衣體法式二様に  
涉りて從來諍鬪の根源を斷つて能はず是に於て兩本山は國の爲

法の爲更に協議を盡して互に相譲り二様の衣體法式を圓融して同一ならしむるに決し明治廿一年一月一日より全國一宗内の法衣を一にし明治廿四年一月一日より同く法式を一にするを告諭せり乃ち數百年來種々の變故に遭遇し兩本山角立して睥睨反目一宗恰も兩派の形を爲し衣體法式各別にして動もすれば紛争誼鬻是非の巷に彷徨せし者方に其跟跡を絶ち春風台蕩重ねて覺苑の華を開くは明治廿四年一月一日を以て紀元と爲す可きなり宗内の事情此の如くなるか故に是迄宗教運歩の進行上他宗異教に先鞭を著くるを能はざりとは秩序の然らむる所誠に已むを得ざるなり自今以後は衲等兩本山及全國末派僧侶同一の法衣を着し同一の法式を行と同一の針路に向て信教自由の人民を化導するに躊躇せず進て他の頂顛を驚過せんを冀望す蓋し布教興學は宗教社會の専務なれば本宗も亦從前敢て之を等閑にせず

客歲會議の議決並に建言等に採り宗制寺法を改良し布教方案を修正し學科程度を更新して以て着々歩を進め世間の風潮に乗じて以て吾か宗教の實益を施さんと欲す曹洞宗護法會係は明治十六年中に收納せる寄附金蓄積元利高を第一回の報告と爲し明治廿一年第六回報告に至る迄毎年十二月收納蓄積元利の金高明細を示し事務管理の考課狀も亦毎年微細に報告して全國末派に知らしめたり而して明治廿二年に金三十拾萬圓の基本額を確定せしは同年曹洞宗務局甲第廿九號普達に詳かなり未だ整頓を告げずして護法會第二回の繼續する者は今後復毎年之を明瞭に報告せしむ可し是故に衲等兩本山は茲に明言す護法會金收納帳簿蓄積出納に於ては始めより終りに至る迄確實公正にして一厘一毛も相違あるをなと末派寺院及檀家にして寄附金を納めたる者徳誼親交上より來て懇話と若くは宗規の範圍内に在て秩序を蹈み帳

簿並に證書閱覽を請ふ者あれば兩本山は歡喜して之を許さむるに憚らず

今や時勢の進度風尙の沿革に由り宗規を創制若くは改定するは兩本山の大權なり故に今より宗制寺法布教方案學科程度を改良するとは衲等専ら其責に任す可しと雖も之を實際に施行するの曉に至ては寺院一般分擔の任に當らざるを得ず今茲に最も各寺院の注意を要する所の者は帝國憲法に謂ゆる信教自由の明文是れなり國家の爲に秩序安寧を妨げざる吾宗教を擴張して他宗異教に超駕せんと欲する道念を忘失す可らざる目下宗内の事業は改正提起を要する者一にして足らず本末一致して宗規の範圍内に運動し異教を防禦し他宗の後へに立たざる様畫策する所あらんを要す

禮讓に依らず秩序に遵はず已に宗規の範圍を出て兩本山の大權

を傷けんとするが如んは其及ぼす所の弊害果して如何そや春風台蕩覺苑の華を開かんとする數年來の經營は變じて殺風景の觀を現し紛諍誼囂忽ち舊習を再演し亂れて糸の如くなるに至らんと掌を反すか如し闔宗前途の不幸焉より大なるはなかる可し資格を定め分限を畫し權利と義務との區界を立て、一宗の秩序を保維するとは一萬四千の寺院二萬有餘の僧侶を統管するに欠く可らざるの組織なり故に宗規の範圍内に在て秩序に違ひ温良謙讓本末協和と相阻隔することなく信教自由の社會に立て常に世間の風潮を諦觀し宗教必要の時期に乗じ安心立命の標準を開示するは勿論布教興學各自の分に隨て實際に舉行し國の爲法の爲日夜本末同一の針路に向て化導に躊躇せず前途闔宗の最大幸福を獲得す可きの進行を爲さん事を期す可し苟も毫釐の差を以て千里の過を招くと勿れ

明治廿三年一月廿五日

永平寺現住 瀧谷琢宗

總持寺現住 畔上樸仙

全國末派寺院

甲第四十一號

本年以後は宗制寺法を改良し布教方案を修正し學科程度を更新して以て着々歩を進め世間の風潮に乗じて以て吾か宗教の實益を施さんと欲すとは明治廿三年一月廿五日兩本山現董貫首猥下の一宗全般に告諭せられたる所なり是に於て學制は既に改良を告げ今正に實行の緒に就きたり布教の標準も亦方に定まり其實施を令せらるゝの日近きに在んとす夫れ然り今や將に宗制寺法の改良に着手し漸く一宗制度の大革新を爲す可き順序に達せり然るに宗制寺法の改良は事頗る重大に涉り其編製に要す可き材料太九夥く之を蒐集考査し製定完功を告ぐるの日月も亦短らず隨て其經費に多額を要するは固より瞭然なり而して昨今兩年ハ

宗費殊に相嵩み旁以て今般兩本山協議を遂げ宗制寺法の改良は來る明治廿四年二月一日より着手し遅くも同年中に完成を告ぐ可き旨に相定め候條各自宜く此旨を体認し分に隨ひ祿に應じて廣く宗教を布演す可し

右普達候事

明治廿三年十月四日

曹洞宗務局

甲第三號

全國末派寺院

明治廿三年當局甲第四十一號普達に基き本年二月一日より宗制寺法の改良に着手す就ては末派寺院住職以上の僧侶にして其改良に對し意見を抱持する者は左の心得書に遵據し意見書相認め來る四月十日迄に之を呈出し編製委員の参考に供ふ可し

宗制改良意見書呈出心得

一宗制寺法は一宗經綸の大典にして之を改良するは一宗扶殖の

基礎を定むる者なるを体悉し既往を照鑑し將來を推究して續  
密の注意を加へ改良に對する意見書を起草す可し  
一意見書は(用紙美濃紙)十三行廿五字詰にし書体は楷字たる可  
し

右普達候事

明治廿四年二月七日

曹洞宗務局

甲第九號

全國末派寺院

明治十七年(八月)公布第十九號に據り編次せる宗制別冊第一號  
より第十一號に至る迄明治十八年五月廿八日政府の認可を得た  
り依て將來實施期限並に心得方左の通指示す可き旨兩大禪師被  
申付候條宗内一寺住職は勿論前住職徒弟及檀越信者等一般之を  
敬遵す可し此旨普達候事

明治十八年六月十日

曹洞宗務局

宗制實施期限並心得方

第一號(両山盟約) 第二號(本末憲章)

右は従前政府の聞置を経て既已に施行致來り候處明治十八年  
(三月)内務省丁第一號達に由り更に修正編入して復た認可を  
得たる者に付自今直ちに従前の通り實施す(第三號以下は略す)

永平寺

昨夏 御沙汰之筋有之候處今般御取糺之上其寺總持寺共本山如  
故各其末寺取締違亂無之様可致旨更に被仰出候事 但永平寺は  
道元開基之祖山たるを以て席順總持寺の上たる可く候尤兩寺之  
末派互に轉住向後差止候事

明治二年己巳十二月

太政官

總持寺

昨夏 御沙汰之筋有之候處今般御取糺之上其寺永平寺共本山如

故各其末寺取締違亂無之様可致旨更に被仰出候事 但永平寺は  
道元開基之祖山たるを以て席順總持寺の上たる可く且其寺從來  
輪番住持之處向後碩學智識之者を擧て住持たらしむ可く候尤兩  
寺之末派互に轉住自今差止候事

明治二年己巳十二月

太 政 官

太政官達第十九號

神 佛 各 管 長

自今神佛教導職を廢し寺院の住職を任免し及教師の等級を進退  
するとは總て各管長に委任し更に左の條件を定む

第一條 各宗派妄りに分合を唱へ或は宗派の間に爭論を爲す可  
らず

第二條 管長は神道各派に一人佛道各宗に一人を定む可し  
但事宜に因り神道に於て數派聯合して管長一人を定め佛道に  
於て各派管長一人を置くも妨げなし

第三條 管長を定む可き規則は神佛各其教規宗制に由て之を一  
定し内務卿の認可を得可し

第四條 管長は各其立教開宗の主義に由て左項の條規を定め内  
務卿の認可を得可し

- 一 教規 一教師たるの分限及其稱號を定むる事
- 一 教師の等級進退の事

以上神道管長の定むべき者とする

- 一 宗制 一寺法 一僧侶並に教師たるの分限及其稱號を定む  
る事 一寺院の住職任免及教師の等級進退の事 一寺院に  
屬する古文書寶物什器の類を保存する事

以上佛道管長の定むべき者とする

第五條 佛道管長は各宗制に依て古來宗派に長たる者の名稱を  
採取調へ内務卿の認可を得て之を稱するを得

右布達候事

明治十七年八月十一日

太政大臣 三條實美  
内務卿 山縣有朋

内務卿 内諭

神佛 各 管長

今般神佛教導職を廢せられ第十九號布達相成候に付ては左の通  
相心得可申事

一各宗派の間に於て妄りに分派合宗を唱へ若くは内外各宗派の  
間に爭論紛議を爲すは固より法教者の警む可き者なり若し之  
に因て人心を煽起し安寧を妨害するとあれば國に禁令あり亦  
宜く戒む可き所とす若し夫れ教義を論じ宗意を議する等の事  
は其宗派内に於て之れか調理裁定を爲し紛糾を致すとある可  
らす

一管長は能く事理に通じ學徳兼有する者を以て之に任す可し之

を定むるの法或は血脉に因て相承け或は寺格に因て相襲き或  
は之を推任し或は之を薦舉するとして一に各宗派固有の教規宗制  
に因て之を定め内務省に差出し認可を請ふ可し

右爲心得内諭候事

明治十七年八月十一日

内務卿 山縣有朋

曹洞宗宗制第一號兩本山盟約

第一條 兩山は貫首以下執事役位に至る迄尋常水乳の如く混和  
親睦を旨とし共に宗風舉揚の永圖に注意するを主眼となす  
第二條 東京兩本山出張所を總稱して曹洞宗務局と名く宗門の  
制度を一途にし全國末派を統管するの所とす其本山たる權利  
を有するは兩山同等にして差異なし而して位次の甲乙は固よ  
り違亂す可らず

第三條 曹洞宗管長は兩山貫首毎一年交番を以て之を勤むるを



定規となす曹洞宗務局に在りて兩本山の全權を總理す

第四條 兩山各々制度を出すときは末派の嫌疑を招き且つ協和に妨害あり故に全國は勿論假令一府縣下たりとも末派一般へ達す可き事件は一山限り該山内より直ちに發布するを得ず必ず曹洞宗務局へ通牒して兩山熟議を遂げ支梧無之者は局達を以て該事を辨す可し 但直末又は一寺一已に關する件は本條の限に非ず

第五條 宗門の汚隆に關する重大の事件ありて兩山意見を異にし可否を決せざる者有るときは全國宗務支局の衆議に附し多同を以て之を決す可し 但時宜に依り末派總代を召集して議員等と公論に決する可し

第六條 兩山貫首及執事役位の者第一條の旨を體認し決して互に誹議の念を抱く可らず是非を説くは即ち是非の人俗士すら

猶之を愧つ況や佛家に於てをや協和を破る職として之に由る最も戒慎を要す可き者とす 但瑕瑾あるを見認むるときは上に對しては之を諫め下に向ては之を諭し同朋には忠告す可し 第七條 貫首交代の節は全國末派の投票を以て後任を確定し之を撰擧するに方り互に添書を請求して兩寺一體の公證となす可し

第八條 衣體及行法は永瑩清規の内各自の志趣に任せて遵守せしむる者なれば兩山々内を除の外何れの國何れの寺を問はず其制限を立つ可らざる者とす 但衣體行法と異にする所以に因り末派を見るに彼我の偏執ある可らず

第九條 自今一言の訴願等誓て政府に奏する勿れとは大藏省演達の大意にして兩山等しく敬承せし所あり是故に若し此の盟

約に背き一方の本山より訴願を企つるときは其貫首ハ自ら本山の權利を抛擲せる者と認むるを定規となす 但越本山より之を企つれば能本山貫首は直に該事を末派に報告し越本山貫首を退隱せしむるの全權を有する者とす能本山より之を企つれば越本山貫首之れか處置をなすと同然たる可し

第十條 末派の僧侶或は一本山の爲と唱ひ偏黨の私論を起して兩山の離間を醸し又は分派獨立を主張する者有るが如きは兩山貫首之を懇諭し改心せしむ可し若し承服せざるときは宗規に照らして宗内を黜斥す可し

以上

曹洞宗制第二號本末憲章

第一章 本山の末派に對する權利

第一條 曹洞宗管長(兩本山を云ふ下皆同し)は全國末派寺院並

僧侶に對し宗教上に交渉する所の一切の事務を統管するの大權を有す

第二條 曹洞宗管長は一宗を統管し宗教を維持する爲め時勢の進度風尚の沿革に由り宗規(法令規約章程の類)を創制若くは改定之を宗内に頒布し遵守せしむるを得

第三條 曹洞宗管長は一宗を統管し宗教を維持する爲め全國末派寺院に對し費途の淨財を募集するを得

第四條 曹洞宗管長は全國末派寺院並に僧侶に對し宗規の權衡に據て褒貶黜陟を舉行す

第五條 曹洞宗管長は全國末派寺院並僧侶及信徒宗規上より起る所の一切の争訟を和解若くは裁決す 但直末寺院にして單に其本山の裁制に據る可き規約ある者は該規約に據る

第六條 曹洞宗管長は全國末派寺院並僧侶信徒に對し宗規上に現行する一切の免牘(兩本山捺印)を授與す但直末免牘及轉衣首座號和尚號賞狀の類一山に限る者は兩本山各專行す

第七條 曹洞宗管長は執事其他の役員を特撰して宗規を舉行するの方法を補佐せしむ尤も東京出張所執事に限り本山親から三名以上を撰出し之を末派總代委員へ下附し委員をして其一名を撰定せしむるを例とす

以上七箇條は兩本山固有の特權なり故に貫首は本山住職受請の翌日より(退隱遷化)の前日に至迄何れの時何れの處を問はず本山の全權を掌握して之を實際に舉行せらるゝ者とす然れとも兩本山各々末派に對し別に制度を出すを得ず(宗規及結約上に區別あるを除く)必ず代々兩本山盟約を恪

守して此の全權を當任管長に委託す可し

第二章 本山の末派に對する義務

第八條 兩本山は東京に各出張所を置き共同の事務所を總稱して曹洞宗務局と名く管長茲に住在し兩本山固有の特權(第一章)を糾合して宗務を一途に處理する所とす

第九條 兩本山は全國末派に便宜を與ふる爲め各府縣下に宗務支局を設立し管長を指揮して宗規の舉行を分掌せしむ

第十條 兩本山は全國末派を保維し信徒を固結する爲め各府縣下に曹洞教會を設置せしめて管長之を監督す

第十一條 兩本山は全國末派の徒弟を教育し宗教を敷演する爲め専門本校を共立し及支校を公設せしめて管長之を監督す

第十二條 兩本山の淨財募集若くは布教の方法を謀る爲め時として地方末派總代を徵集して議會を開き又は議案を末派總代

委員へ下附して意見を管長に稟申せしむ此場合に於ては管長決を過半数に採り實際施行す可き者とす 但末派寺院より募集の金穀は出納を明瞭にして該報告を爲す可し

第十三條 兩本山とも特有の権内に在て領收する淨財(免贖轉衣恩金乃至香資茶湯料の類)は報告中に計算せず本山限り離微の規程を嚴にして之れか護惜を爲す可し 但兩本山は何等の事故ありとも議會の議決を経ずして負債を起して之を末派寺院に分擔せしむるを得ず

第三章 末派の本山に對する權利

第十四條 全國末派寺院は兩本山に對し該固有の特權を掌握せらる可き貫首を撰擧するの公權を有す

第十五條 全國末派寺院の五名の總代委員を差し曹洞宗務局と協議するを得

第十六條 各府縣下末派寺院は該地方限り宗規舉行の分掌を受く可き宗務支局管理者即教導取締を撰擧するの公權を有す

第十七條 各府縣下末派寺院は該地方限り二名以上の總代委員を差し宗務支局と協議するを得

第十八條 全國末派寺院は兩本山に於て開設する議會に總代委員を出頭せしめて議事に參與し若くは兩本山より議案を委員に下附して意見を問ふときは委員は該議案に一團の見込を記し可否を管長に稟申するを得

第四章 末派の本山に對する義務

第十九條 全國末派寺院は兩本山に對し各自信認の多同を以て貫首を公撰せし以上は宗規制定を管長に委託するは勿論なりとす故に曹洞宗務局(管長所在)より發する所の一切の命令は宗内一般に遵守するの責ある者とす 但本條の次第たるに依

り未派僧侶は管長即ち兩山貫首の特撰若くは撰出を以て執事以下の職務を命せらるゝとあるときは必ず之に奉事す可きの責任を有す

第廿條 各府縣未派寺院は各自信認の多同を以て教導取締を公撰(規程に觸るゝときは管長特撰)せし以上は地方宗務を取締に委託するの勿論なりとす故に宗務支局か管長の指揮に據て舉行する所の一切の云爲は必ず隨順するの責ある者とす 但本條の次第たるに依り地方僧侶は取締の精撰を以て支局詰其他の役務を達せらるゝとあるときは必ず之を受く可きの責任を有す

第廿一條 宗務本支局及専門本支校は都て未派の爲に之を設立す故に毎歳の經費は全國未派寺院若くは各地方寺院に於て負擔す可きは勿論なりとす 但費途の金額及課賦の方法は管長

又は支局管理者即取締議案を作り會議若くは下問に附すを定則となす

第五章 總則

第廿二條 此の憲章に牴觸して宗規を紊亂する者ハ住職前住職徒弟に論なく一宗の妨害を生ずる者と爲し宗内を撰出す可し  
第廿三條 此の憲章に牴觸する命令ハ縱令曹洞宗務局より發する者たりとも未派寺院之を遵奉せざるの勿論にして之を破毀するの權を有する者とす

右五章廿三條ハ一宗本末權限の綱領と爲し自今以後共に本分を確守して相敬愛し宗教興隆を謀る可し

以上

編輯の旨趣並に凡例

一本書は開宗以還の概要を摘叙して曹洞宗沿革の便覽に供す

一本書の編歴代 皇帝の世次と暦年月日との順序に依りて一は年鑑に便し一は參照の捷徑に便す  
 一本書の輯を四種に別ち第一宗名未定本末不備の時代第二宗名勅定本末盡立の時代第三幕政の世總持寺目代關東三刹の時代第四皇政維新兩山併立の時代と考して以て時世の變遷に依て一宗の沿革は如何の成行にてありしかを一見速領するの便に供ふ  
 一本書の卷首に兩山貫首宗制改良の告諭と宗務局宗制革新編纂着手の普達とを以て叙辭に代へたる者要唯た人をして兩本山が疾くより既往宗制の弊害を實驗し既に將來の宗是を畫策せられつゝありとを知らしめんとするに在り  
 一本書の叙尾に太政官達と内務卿内諭と及び本末憲章兩山盟約とを添附したるは敢て別意あるに非ず唯た政府と曹洞宗との

關係する大綱の便覽に供ふるのみ且つ曹洞宗の制規條章千百の夥多に渉るも日用切實に要用なるは憲章と盟約とに過ぎず故に此の二種を掲げて讀者必携の便に資す  
 一本書の卷末に一宗制度の革命に係る建言と兩本山貫首並に當任管長との間に於て建言採容の可否照會往復して結局採容に決し臨時議會を開き議題となりたる迄の係要書類とを以て跋言に換へたる者亦た別に意なし唯た人をして宗門既往の惡弊と宗制の禍害とは本末一般に認定する所にして疾く議會の議を経て既に改革に着手せられて在りし者にして今日新に分非論の起りたるに非ず即ち是れ時機の當來にして其改革を實行せられたる者なるを知らしめんと欲するのみ

編年  
摘要  
曹洞史略

洞上沙門 聖嶽大仙輯錄

永平寺概歴(寺院稀少ニシテ宗名ナク又本末ナキ時代)

- 土御門天皇正治二年正月二日永祖誕生久我内大臣通親卿ノ男
- 順德天皇建曆二年春永祖三井寺良觀僧正(叔父)ニ就テ出家受戒希玄ト名ク後改メテ道元ト稱ス
- 後堀河天皇貞應二年永祖宋ニ入り天童山ニ登ル彼ノ土僧臘大ニ乱ル祖深ク之ヲ慨シ屢宋帝ニ上奏シテ戒次ヲ正ス
- 同帝嘉祿元年九月十八日永祖如淨禪師ノ室ニ入テ受戒嗣法
- 同帝安貞元年冬永祖歸朝建仁寺ニ寓ス居ル一三年
- 同帝寛喜二年永祖京都深艸ニ閑居紫陌紅塵ヲ避ケ王侯貴顯ノ來訪ヲ絶チ以テ佛ノ道ヲ修メテ佛ノ道ヲ傳ヘテ國王大臣ニ親近セス深山幽谷ニ閑居シテ佛祖ノ聖胎ヲ成ル
- 四條天皇嘉禎二年冬永祖請ヲ受ケテ宇治ノ興聖寺ニ入テ開堂演法ス
- 後嵯峨天皇寛元元年永祖王侯貴顯ノ繁訪ヲ厭汚シ波多野出雲守義介ノ請ヲ容レ越

前國吉田郡志比ノ深山ニ閑居ス

●同帝同歷二年七月起工九月ニ至リ一寺成ル吉祥山大佛寺ト號ス

●同帝同歷四年大佛寺ヲ改メテ永平寺ト稱ス永祖自ラ撰號スル所ナリ

●後深草天皇寶治元年永祖北條時頼ノ請ニ應シ鎗倉ニ赴ク時頼受戒入道シテ道崇ト號ス祖ノ授命スル所ナリ

●同帝同歷二年時頼建長寺ヲ創設シテ永祖終焉ノ地ト爲サントス祖固辭シテ受ケテ三月十三日錫ヲ飛ハシテ越前ニ歸ル

●同帝建長二年帝永祖ニ賜フニ紫衣徽號ヲ以テス祖乃チ五絶一詩ヲ賦シテ奉還ノ意ヲ述フ詩ニ曰ク永平雖谿淺 勅命鍾重重却被猿客笑紫衣一老翁ト更ニ法孫ニ嚴誠シテ曰ク後代兒孫於當山被紫衣黃衣莫作出世事予爲後鑑記之畢ト(永平廣錄ニ出ツ就テ見ル可シ)

●同帝同歷五年八月二十八日永祖示寂

●今上天皇明治十二年十一月二十二日永祖ニ承陽大師ノ徽號ヲ賜證セラレ

總持寺概曆 (寺院繁盛宗名確  
定本末並立時代)

●龜山天皇文永五年十月八日總祖誕生越前國多福邑ノ豪族藤原某ノ一子(古書史祖ノ氏族ヲ詳記セス蓋シ當時戰亂ノ世韜晦落魄人ノ識知ヲ避ケンノ故ナラン)

●後宇多天皇建治元年四月八日總祖徹通禪師ノ室ニ入テ出家受戒紹瑾ト名ケ道號笠山ト稱ス

●後伏見天皇永仁四年總祖阿州ノ請ヲ受ケ城滿寺ニ赴化ス

●後二條天皇乾元元年總祖加州ノ請ヲ受ケテ大乘寺ヲ董マス

●花園天皇應長元年總祖加州淨住寺ノ請ヲ受ケテ開祖ト爲ル

●同帝正和元年總祖滋野氏ノ請ニ依リ能州酒井ニ赴化ス

●同帝同歷二年總祖酒井ニ於テ一寺ヲ開創シテ之レニ住ス今ノ洞谷山永光寺ハ即チ是レナリ

●後醍醐天皇元應二年總祖悲母ノ靈位ヲ祭ルカ爲メニ能州ニ於テ一寺ヲ創ス之ヲ圓通院ト號ス後チ永壽院ト改ム

●同帝元亨元年總祖定賢律師ノ請ニ應シ能州風至郡栴比ノ莊諸嶽寺ニ移ル寺ハ本ト律院賢師ノ住スル所ナリ祖之ヲ改メテ禪刹トナシ諸嶽山總寺持ト號ス今日現ニ曹洞宗寺院僧侶檀家信徒カ一般ニ奉戴シ尊崇スル大本山ハ即チ是レナリ

●同帝同年八月帝十種ノ問題ヲ下シ奏答ヲ命シ玉フ總祖乃チ 勅問ヲ奉シテ痛快速切ニ奏答ス十種ノ勅問一々ノ奏對深ク 帝意ニ合ヒ特ニ歡感ヲ荷フ

●同帝同歷二年八月廿八日 帝特ニ左ノ詔勅ヲ賜フ



能州諸嶽山總持禪寺者直續曹溪之正脉、專振洞上之玄風、特依爲日域無雙之禪苑、補任曹洞出世之道場、宜相並南禪第一之上刹、若紫衣法服、奉祈寶祚延長者、

天氣如此、仍執達スル、如件、

元亨二年八月廿八日

經 願

瑩山紹瑾和尚禪室

●同帝正中元年總祖一宗十條ノ龜鑑ヲ規定シ以テ末代ノ宗制ト爲ス曹洞一宗ノ宗規宗制ハ全ク之ヲ原始ト爲ス是ヨリ以前ハ曹洞ノ寺院僧侶ノ數未ダ忒テ儻指ニ滿ヌス故ニ本山ノ稱ナク又末派ノ名ナシ隨テ宗規ナク宗制ナシ是レ當時ノ實狀ナリ依テ知ル十條ノ龜鑑ハ正ニ是レ宗規宗制ノ原始ナルヲ總祖此年ヲ以テ席ヲ嫡傳ノ法嗣我山和尚ニ讓ル之ヲ二代禪師ト爲ス

●同帝同曆二年八月十五日總祖示寂

●後村上天皇正平六年（北朝崇光天皇觀應二年）大本山總持寺山内ニ五院ヲ開創ス普藏院、妙高庵、洞川庵、傳法庵、如意庵、ハ即チ是レナリ

●同帝同曆九年（北朝後光嚴天皇文中三年）三月二日 帝總祖ニ佛慈禪師ノ徽號ヲ勅證セラル

●同帝同年十月三日總持寺ニ左ノ詔勅ヲ賜フ

能州總持寺住持職位之事細カニ傳（贊嶺）之正脉ヲ直ニ匡ニ曹洞ノ之勝蹟ヲ祖位齊ニ瑞龍ニ宗綱振ニ天下ニ恢弘シ祖道ヲ舉ニ揚シ佛法ヲ鎮ニ奉レ祈リ 皇圖長久ヲ於萬春千秋ニ益ニ榮ニ少林ノ之芬芳ヲ於一華五葉ニ者ナリ 天氣如此、仍執達スル、如件、

正平九年甲午十月三日

行 房

總持寺住持禪室

●同帝同曆十七年（北朝後光嚴天皇康安二年即壬寅元年）壬寅二月九日總持寺二代我山禪師左ノ如ク住持職ヲ規定セララル

總持寺未來住持職事

右彼ノ寺ハ瑩山和尚讓ニ與セル、紹碩ニ處也仍於後代ノ之住持職ニ者於紹碩法嗣之中ニ撰ニ器用ノ仁ナ而シテ可レ補ニ住持職ニ於テ末代ニ守ニ此ノ旨ナ可ニ住持ニ之狀如件、

康安二年壬寅二月九日

住持 紹 碩 判

●同帝同曆十九年（北朝同帝貞治三年）十二月十三日總持寺二代我山禪師五院輪番住持職ノ事左ノ如ク規定セラレタリ

總持寺山門住持職之事

紹碩門下守ニ嗣法之次第ニ五箇寺可シ住持ス若シ此ノ中有ラハ山門廢タル者ニ法眷等相寄リ

評ニ定<sup>セヨ</sup>之<sup>ヲ</sup>仍<sup>テ</sup>爲<sup>シ</sup>後證<sup>ト</sup>垂示<sup>スル</sup>如<sup>レ</sup>件<sup>ノ</sup>

貞治三年十二月十三日

住持 紹 碩 判

●同帝建徳元年(北朝同帝應安三年)八月十三日總持寺五院太原等ノ五禪師左ノ如ク議定シ以テ末代永遠ニ總持寺ヲ本寺トシ永平寺ヲ西堂位トシテ之ヲ永世無窮ノ規式トセラレタリ

峩山門派ノ之衆總持住番ノ之事

奥州正法寺無底長老ハ住院ノ之始<sup>メ</sup>也其ノ外ノ衆ハ無シ總持住院不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>爲<sup>ル</sup>東堂位<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>也永平寺永光寺ハ可<sup>レ</sup>爲<sup>ル</sup>西堂位<sup>ニ</sup>之間答終<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>落居<sup>ニ</sup>故自<sup>リ</sup>峩山門下<sup>ニ</sup>堅<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>出<sup>ル</sup>入<sup>ノ</sup>事必<sup>シ</sup>矣然<sup>リ</sup>而<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>聯判狀<sup>ヲ</sup>總持寺於<sup>テ</sup>末代<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>爲<sup>ル</sup>洞上<sup>ノ</sup>之本寺<sup>ニ</sup>儼相定<sup>ムル</sup>者<sup>ノ</sup>也仍<sup>テ</sup>聯判如<sup>レ</sup>件<sup>ノ</sup>

應安三年庚戌八月十三日

普藏院 太原 判

妙高庵 通 幻 判

洞川庵 無 端 判

傳法庵 大 徹 判

如意庵 實 峯 判

●後龜山天皇天授四年(北朝後圓融帝永和四年)十月廿三日總持寺當番現住通幻等ノ

七禪師協議聯判シテ左ノ如ク本寺守護ノ之件ヲ定ム

峩山和尚ノ之門人衆聯判狀

洞谷山住院ノ之事總持寺東堂位無シ落居<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>住<sup>ル</sup>院<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>向後<sup>ニ</sup>者總持寺ヲ爲<sup>ス</sup>本寺<sup>ト</sup>法眷門徒中一味同心シテ而可<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>富寺<sup>ヲ</sup>殊更有<sup>ル</sup>異子細<sup>ニ</sup>時<sup>ハ</sup>者抛<sup>テ</sup>萬事<sup>ヲ</sup>就<sup>テ</sup>本寺<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>評議<sup>ス</sup>若<sup>シ</sup>於<sup>テ</sup>背<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>旨<sup>ニ</sup>輩<sup>ニ</sup>者不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>爲<sup>ル</sup>峩山門下<sup>ノ</sup>子孫<sup>ニ</sup>仍<sup>テ</sup>聯判<sup>スル</sup>之<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>件<sup>ノ</sup>

永和四年戊午十月廿三日

安祥寛 叡 判

永壽惠 祐 判

佛陀碩 壽 判

總持當住 通 幻 寂 靈 判

總持前住 無 端 祖 環 判

總持前住 大 徹 宗 令 判

總持前住 實 峯 良 秀 判

●同帝弘和二年(北朝同帝永徳二年)十月廿日總持寺前住大徹等ノ三禪師開祖佛慈禪師二代峩山禪師ノ遺規ヲ繼キ後代ニ鞏固ナラシメカ爲<sup>メ</sup>更<sup>ニ</sup>左ノ遺文ヲ留置シテ規戒垂證セラル

常山住持職ノ之事如シ

二代和尚御遺記ノ及ニ于今ニ於ニテモ末代ノ孫弟子中ニ然ル也但ニ雖然、門徒出仕無ニ和合和伏ノ儀ニ不可ラ請ニ住持ノ各々相集リ可ニ評定和評ス仍ニ爲ニシテ後證ニ置文ス如レ件ノ

永徳二年壬戌十月廿日

前住 良 秀 判  
前住 宗 令 判  
前住 寂 靈 判

爾來總持寺末派ノ彌漫大山巨刹ノ概要ヲ舉クレハ左ノ如シ其旺隆以テ知ル可キナ

一本山山内五院

五箇寺

普藏院 妙高庵

洞川庵 傳法庵

如意庵

一本山直末寺院

三十八箇寺

一五院各直末寺院

六十九箇寺

普藏院末

廿三箇寺

妙高庵末

十六箇寺

洞川庵末

五箇寺

傳法庵末

十

三箇寺

如意庵末

十二箇寺

五院並ニ本山直末及ヒ五院各直末總計一百十二箇寺(文政年度ノ關ニ萬餘箇寺)

(明治維新廢合ノ結果現存一萬四千百餘箇寺)

總祖佛慈禪師圓明國師ノ法孫ニシテ俊傑高僧ノ輩出セシコト左ノ如シ

一總祖ノ直嗣 五人 峩山。明峰。無涯。靈庵。龍石

一二代ノ法嗣 廿五人 太源。通幻。無端。大徹。寶峰。無底。順正。無藏。無際。淨智。太山。曉心。普天。無外。無等。月泉。無極。道雙。玄翁。妙忍。大方。良覺。竹堂。竺源。天澤。

一普藏開基太源ノ法嗣 二人 梅山。了堂

一妙高開基通幻ノ法嗣 十人 了庵。石屋。一徑。普濟。不見。天應。天真。天德。量外。芳庵。

一洞川開基無端ノ法嗣 八人 大琳。敬堂。玉麟。瑞岩。青山。曇雙。日東。雲澤。

一傳法開基大徹ノ法嗣 十六人 竺山。月山。天巖。春岩。大成。旨山。越雙。悶堂。月江。普門。不藏。浩有。月桂。義天。禪室。直庵。

一如意開基寶峰ノ法嗣 十二人 貝林。悅堂。明窓。金龍。大等。綱庵。仲明。妙雙。傳芳。大澤。大用。萬山。

一無底以下廿祖ノ法嗣 省畧シテ記セス

一今々天下曹洞一宗ノ僧侶大凡四萬有餘中九分八厘強皆ナ以上諸列祖ノ系嗣法孫ニ非サル無シ

●後土御門天皇文明五年永平寺回祿ノ災アリ

●同帝明應元年以來永平寺派下ノ僧總持寺派下ノ僧ニ説キ相結託シテ永祖ノ遺誡ニ背キ道元禪師カ山居ノ地ト定メラレタル永平寺ニ於テ轉衣出世ヲ行フノ道場ト爲サントノ非擧ヲ企テタリ

●後奈良天皇天文八年永平寺言テ作テ曰ク前帝後村上天皇文中元年ヲ以テ賜ハリシ出世道場ノ繪旨ハ後土御門大皇文明五年回祿ノ災ニ罹リテ紛ハセリ依テ重テ繪旨ヲ下賜セラレンコト願出テ遂ニ左ノ如キ勅詔ヲ掠奪セリ(然レモ紫衣繪詔ハ永祖ノ奉受セサル所ニシテ山居ノ地タル祖意ニ背戾スル者ナリ然ルヲ敢テ之ヲ詐ハリ元來繪旨ヲ賜ハリシコト無キヲ特ニ前代ヨリ之レ有リシカ如ク假裝シテ強テ之ヲ欺奏シ遂ニ掠賜セリ而シテ其翌九年詐事發覺シテ取消ノ命アリシコトハ次段ニ於テ明瞭ナルヲ得可シ)

當寺事依テ爲ニ日本曹洞第一可シ爲ニ出世ノ道場ニ之旨應安(北朝後圓融帝ノ曆號)度被テ成サ救裁ニ之處去文明五年依テ回祿ニ令ニ紛失ニ之由破ニ聞召テ訖シ不可レ有ニ相違ニ之旨大氣所ナリ候ノ也仍テ執達スル如シ件ノ

天文八年十月七日

左中辨晴光

永平寺住持禪室

●後奈良天皇天文九年總持寺輪番住持普應和尚(能州七尾惠眼寺第六世)大ニ永平寺

ノ非擧欺天掠詔ヲ惡ミ 帝ニ奏上シテ其取消ヲ仰請セリ而シテ 帝特ニ詔勅ヲ下シ之ヲ總持寺ニ賜フ其詔文ハ左ノ如シ

能州鳳至郡櫛比ノ莊諸嶽山總持寺門派ノ之衆明應年中以來於テ永平寺山居ノ地ニ成シ出世ノ儀式ヲ着ニテ紫衣黃衣ヲ背シ先例ニ剩レ永平寺ヲ爲スノ出世ノ道場ト之旨雖レ帶フト應安(北朝後圓融帝ノ曆號)勅裁ヲ令ニ紛失ニ之由去年企テ謀訴ヲ掠メ賜ソノ繪旨ノ之條太タ以テ不可ラ然ル所詮任ニ道元和尙遺文ノ之旨ニ自今以後被レ停止シ訖ニ存シ其ノ旨ヲ彌ク可レ奉ル所ニ皇家ノ再興ヲ者ナリ 天氣如此ノ仍テ執達スル如シ件ノ

天文九年二月廿七日

左中辨判

當住普應和尚禪室

●正親町天皇元龜元年總持寺兵燹ニ罹リ繪詔ヲ燒失ス(元龜四年ハ即チ天正元年ナリ)

●同帝天正元年永平寺ハ總持寺ノ繪詔燹失テ好機トシテ異義ヲ唱ヒ非擧ヲ企テ總持寺ノ固有ニ屬スル出世ノ道場ト本山ノ資格トヲ橫奪シテ永平寺自ラ出世ノ道場曹洞ノ本山タラントセリ依テ總持寺ハ止ムナク全力ヲ舉ケテ之レニ對抗シ遂ニ能ク之ヲ防排セリ是ヲ以テ特ニ之ヲ 帝ニ奏聞ス 帝即チ日野左小辨ヲ以テ前繪ノ寫ヲ下賜シ出世ノ道場曹洞ノ本山タル事ノ相違ナキヲ証明セラレタリ

●後陽成天皇天正十七年總持寺ニ對シ更ニ詔勅ヲ賜ハリ而シテ尙ホ大内記爲良勸修寺光豐兩公ヨリ副書ヲ贈ラルル其詔勅及ヒ副書ハ左ノ如シ

依テ爲ニ能州鳳至郡櫛比ノ莊諸嶽山總持寺ノ者曹洞ノ之本寺ニ被レハ補ニ出世ノ之地ニ異ニ于他ニ者ノ也彌々蒙リ勅宣ニ可レ令ニ出世ニ若シ老僧勞侶不レ叶ニ上洛ニ之輩ノ者於ニ當山ニ可レ令ニ成ニ轉衣ヲ者ナリ天氣所レナリ候フ也仍テ執達スル如レ件ノ

天正十七年六月廿七日

左 小辨 判

總 持 寺

五條大内記爲良公ノ副書

今度ハ者曆日在レ洛ニ雖レ被レラレ、屈ニ老懷ニ理 奏スルノ之通被レ達ニ 敬聞ニ繪旨頂戴珍重寔ニ以テ總持寺ノ之再興不レ可レ如レ之ニ然ラハ者永平寺ト與相ヒ談シ揚ニ高札ヲ連署ノ之逆徒堅ク可レ被レ擯出ニ若シ不レ相隨ニ輩有レハ之者爲ニ公儀ト可レ被レ仰セ出ニ候條急度可レ有ニ注進ニ 敬心ノ之趣如レシ斯ノ候也頓首謹言

林鐘廿七日

大内記爲良判

總持寺 五院代 圭除和尙禪室

勸修寺光豐公ノ副書

就テ今度永平寺ト與高札ノ儀ニ不レ被レ相談セ之旨被レ申入レ則チ達ニ 敬聞ニ候處 仁被レ聞

食分ニ被レ、成ニ下ニ繪旨ノ之段當寺企ツルニ再興之基ヲ珍重於ニ然ニ者連署ノ之輩悉ク可レ被レ致ニ擯出ニ儀急度可レ被レ申シ觸レ候自然違犯ノ之族有レハ之者重テ而注進可レ被レ申シ上ニ候謹言

六月廿七日

光 豐 判

總持寺 五院代 寶圓寺和尙禪室

德川氏ノ治世總持寺ノ統宗(目代制度)

●後陽成天皇慶長元年以降後水尾天皇元和寛永ニ至ル三十四年間政權舉ケテ武門徳川氏ニ委スルヤ宗教ノ制度亦タ併セテ同氏ノ手ニ歸シ 朝廷ハ唯々僧位僧官ヲ直轄セラル、ノミ故ニ宗制法規ノ事ハ一ニ德川氏ノ管スル所トナル

●同帝慶長十六年七月將軍家康公ノ召アリ總持寺代トシテ同寺ノ後見職芳春院象山和尙(同院ノ開山加州寶圓寺ノ二世)駿府城ニ出頭公ニ謁シ問ニ應シテ宗門ノ規繩ヲ法要ノ次第逐一ニ詳答セラレタリ時ニ公駿遠參三箇國ノ曹洞宗僧録ヲ遠州可陸齋ニ特命シ更ニ總持寺ノ目代トシテ關東ニ於テ適當相應ノ寺院三箇寺ヲ推撰セシム和尙即チ下總ノ總寧寺武州ノ龍穩寺野州ノ大中寺ヲ撰出セリ依テ之ヲ關東三刹一宗ノ總錄司ト爲シテ寺社奉行ノ宗用ニ當ラシム

●後水尾天皇慶長十七年將軍家康公關東三刹ニ與フルニ左ノ宗門法度書ノ朱印ヲ以

テス（而シテ同曆中幕府大ニ宗門ニ干涉シ總持寺末派ヨリ永平寺へ昇住スルノ濫階一宗ノ禍端ヲ開ク）

一不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>三二十年修行成就<sub>一</sub>之人立<sub>二</sub>法幢<sub>一</sub>事

一不<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>二十年修行<sub>一</sub>致<sub>二</sub>江湖會頭<sub>一</sub>事

一寺中追放<sub>レ</sub>之惡比丘於<sub>二</sub>諸山<sub>一</sub>許容<sub>二</sub>事

一致<sub>二</sub>江湖會<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>五年<sub>一</sub>轉衣<sub>レ</sub>事並<sub>二</sub>修行未熟<sub>一</sub>之僧轉衣<sub>レ</sub>之事

一爲<sub>二</sub>末寺<sub>一</sub>背<sub>二</sub>本山<sub>一</sub>之掟<sub>二</sub>事

右ノ條條於<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>背<sub>レ</sub>者<sub>ハ</sub>可<sub>レ</sub>寺中<sub>ニ</sub>追放<sub>レ</sub>者<sub>也</sub>

慶長十七年五月廿八日

德川家康（朱印）

●同帝同曆十八年十月幕府切支丹邪宗門防禦ノ爲メ各宗門檀那寺請合宗判掟十五箇條ヲ發布シ施行セリ

●同帝元和元年七月將軍家康公永平寺總持寺ノ法度ヲ定メタリ而シテ總持寺ニ與ヘタル法度書ハ左ノ如シ

一遂<sub>二</sub>二十年<sub>一</sub>之修行一致<sub>二</sub>江湖頭<sub>一</sub>經<sub>二</sub>五年<sub>一</sub>僧<sub>ニ</sub>有<sub>二</sub>轉衣<sub>一</sub>之望<sub>レ</sub>者<sub>ハ</sub>以<sub>二</sub>嗣法師<sub>一</sub>之推舉狀<sub>ヲ</sub>致<sub>二</sub>登山<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申理<sub>ニ</sub>從<sub>二</sub>當寺<sub>一</sub>就<sub>二</sub>傳奏<sub>一</sub>申<sub>レ</sub>降<sub>レ</sub>給旨<sub>ヲ</sub>以<sub>二</sub>其<sub>一</sub>上<sub>ニ</sub>出世轉衣<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>披露<sub>一</sub>附<sub>二</sub>非<sub>三</sub>二十年修行了畢<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>法幢<sub>一</sub>事

一出世<sub>レ</sub>之戒臘<sub>ハ</sub>者<sub>ハ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>給旨<sub>一</sub>之日附次<sub>二</sub>第<sub>一</sub>事

一到<sub>二</sub>紫衣<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>當寺永平寺爲<sub>二</sub>當住<sub>一</sub>之仁<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>經<sub>二</sub>三<sub>一</sub>奏問勅許<sub>レ</sub>之時可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>着<sub>一</sub>用<sub>二</sub>兩寺<sub>一</sub>之外一切不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>於<sub>二</sub>退院<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>可<sub>レ</sub>脫<sub>二</sub>紫衣<sub>一</sub>事

一開山忌<sub>二</sub>二代忌<sub>一</sub>加賀能登越中<sub>三</sub>國<sub>一</sub>之諸末寺不<sub>レ</sub>殘可<sub>レ</sub>出仕<sub>ニ</sub>但<sub>二</sub>遠國<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>志趣<sub>一</sub>次<sub>二</sub>第<sub>一</sub>事

右者近年法度相乱<sub>レ</sub>往<sub>レ</sub>紫衣黃衣着用<sub>レ</sub>之僧滿<sub>二</sub>巷街<sub>一</sub>違<sub>二</sub>佛制<sub>一</sub>受<sub>二</sub>人<sub>一</sub>嘲<sub>レ</sub>法度<sub>ノ</sub>陵夷無<sub>レ</sub>甚<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>此<sub>一</sub>且<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>佛法<sub>一</sub>紹<sub>レ</sub>隆<sub>ニ</sub>且<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>宗門<sub>一</sub>繁榮<sub>ノ</sub>相<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>訖<sub>ニ</sub>若<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>違背<sub>一</sub>之僧徒有<sub>レ</sub>之者<sub>ハ</sub>可<sub>レ</sub>處<sub>二</sub>配流<sub>一</sub>者<sub>也</sub>仍<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>件<sub>ノ</sub>

元和元乙卯年七月日

德川家康（朱印）

永平寺ニ與ヘタル法度書ハ左ノ如ク

一遂<sub>二</sub>二十年<sub>一</sub>之修行一致<sub>二</sub>江湖頭<sub>一</sub>經<sub>二</sub>五年<sub>一</sub>僧<sub>ニ</sub>有<sub>二</sub>轉衣<sub>一</sub>之望<sub>レ</sub>者<sub>ハ</sub>以<sub>二</sub>嗣法師<sub>一</sub>之推舉狀<sub>ヲ</sub>致<sub>二</sub>登山<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申理<sub>ニ</sub>從<sub>二</sub>當寺<sub>一</sub>就<sub>二</sub>傳奏<sub>一</sub>申<sub>レ</sub>降<sub>レ</sub>給旨<sub>ヲ</sub>以<sub>二</sub>其<sub>一</sub>上<sub>ニ</sub>出世轉衣<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>披露<sub>一</sub>附<sub>二</sub>非<sub>三</sub>二十年修行了畢<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>法幢<sub>一</sub>事  
一出世<sub>レ</sub>之戒臘<sub>ハ</sub>者<sub>ハ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>給旨<sub>一</sub>之日附次<sub>二</sub>第<sub>一</sub>事  
一到<sub>二</sub>紫衣<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>當寺總持寺爲<sub>二</sub>當住<sub>一</sub>之仁<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>經<sub>二</sub>三<sub>一</sub>奏問勅許<sub>レ</sub>之時可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>着<sub>一</sub>用<sub>二</sub>兩寺<sub>一</sub>之外一切不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>於<sub>二</sub>退院<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>可<sub>レ</sub>脫<sub>二</sub>紫衣<sub>一</sub>事

一開山忌越前一國ノ之諸末寺不殘可シ出仕<sup>タシ</sup>但遠國ノ者可<sup>レ</sup>爲志趣次第事

一日本曹洞下ノ之末派如<sup>シ</sup>先規可<sup>レ</sup>守當寺ノ之家訓事  
右者近年法度相亂<sup>レ</sup>往往紫衣黃衣着用ノ之僧滿<sup>テ</sup>巷街<sup>ニ</sup>違<sup>テ</sup>佛制<sup>ニ</sup>受<sup>テ</sup>人ノ嘲<sup>ヲ</sup>法道ノ陵夷無<sup>シ</sup>甚<sup>ク</sup>於<sup>レ</sup>此<sup>ヨリ</sup>且<sup>ツ</sup>爲<sup>ニ</sup>佛法紹隆<sup>ノ</sup>且<sup>ツ</sup>爲<sup>ニ</sup>宗門繁榮<sup>ノ</sup>相<sup>ヒ</sup>定<sup>メ</sup>訖<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>於<sup>テ</sup>違背ノ之僧有<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>者可<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>配流<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>也仍<sup>テ</sup>如<sup>シ</sup>件<sup>ノ</sup>

元和元乙卯年七月日

徳川家康(朱印)

●同帝同曆六年三月寺社奉行ヨリ總持寺ニ對シ目代ノ制狀ヲ附與セリ而シテ慶長ヨリ元和ニ亘リ總持寺末派ノ僧萬松寺宗奕直チニ進<sup>ニ</sup>永平寺ニ住職シテ其廿一世ヨリシヨリ大ニ兩寺間ノ秩序ヲ紊亂セリ爲<sup>メ</sup>ニ總持寺末派ヨリ續々永平寺ヘ進住スルニ至<sup>レ</sup>リ其人名ヲ舉ク<sup>レ</sup>ハ實ニ左ノ如シ

永平寺廿二世祚天(鎮徳寺ヨリ)同廿三世秀察(雙林寺ヨリ)同廿四世龍札(龍門寺ヨリ)同廿五世良順(龍淵寺ヨリ)同廿六世良義(龍淵寺ヨリ)同廿七世英俊(總寧寺ヨリ)同廿八世門濬(延命寺ヨリ)等ナリ

●同帝寛永年間關東三刹(總持寺ノ目代)ヨリ幕府ノ本末取調ニ對シ左ノ如ク答仲セ

一御朱印諸法度一派本山

越前國

永平寺

一御朱印諸法度一派本山

能登國

總持寺

●同帝同曆四年秋永平寺並ニ總持寺目代大中寺連判<sup>シ</sup>テ轉衣出世ノ儀ヲ謀リ非舉<sup>テ</sup>企<sup>テ</sup>轉衣僧三十四名ノ衣體ヲ剝奪シ傳奏<sup>テ</sup>欺<sup>キ</sup>幕府老中ノ印書ヲ偽造セリ

●同帝同曆五年總持寺ヨリ永平寺ノ詐謀ヲ排斥シ非舉<sup>テ</sup>防訴シテ事全ク成リ遂ニ總持寺ノ勝利ニ歸セリ

●同帝同曆六年六月二十二日永平寺總持寺間ノ訴事落着<sup>テ</sup>告<sup>ク</sup>永平寺祚天和尙ハ伊勢ニ大中寺松薫長老ハ越後ニ各流罪ニ處セラル

●同帝同年八月十三日總持寺五院ヨリ曹洞宗ノ法度ヲ發布シ全国各地ニ新設シタル錄所ノ規定トナセリ

●同帝同年冬錄所新設ノ取調トシテ全國ヲ區分シ總持寺五院ヨリ各其受持ノ方面ヲ定<sup>メ</sup>テ派出巡廻セリ而シテ其派出者ハ妙高庵關徹(上州雙林寺)和尙關東八州及ヒ信州ニ、普藏院盧龍(能州徳翁寺)和尙中國及ヒ畿内ニ、傳法庵龍香(江州青龍寺)和尙東海道及ヒ越後佐渡ニ、如意庵香虎(能州悅叟寺)和尙九州ニシテ、其餘ハ適宜ニ之<sup>レ</sup>カ取調ヲナシテ天下ノ大僧錄及ヒ僧錄五十餘箇所ヲ定<sup>メ</sup>タリ(關東三刹可<sup>レ</sup>睡齋<sup>大僧錄</sup>雙林寺<sup>上野信濃越後佐渡四箇國僧錄</sup>)

●後水尾天皇寛永六己巳年八月十三日總持寺五院連署ヲ以テ曹洞宗ノ法度書ヲ發布

セリ其書ハ左ノ如シ

扶桑國曹洞宗法度

一元和元年古相嗣様被下置當山江御朱印之趣近年遠國未斷成故今度永平寺祚天長老大中寺松薫長老御追放仁被仰付依夫哉山門下如先規堅可爲制法之旨江戶從御奉行所被仰出候右五箇條御朱印之表達背禪侶於有之者宗門令擯別理其國守江武家之可充行法度並無修行之僧侶仁嗣法相續於有之者其師可爲過失況於其身哉山居之判形計仁而唱法語事背先規之掟條可爲停止若不應此旨聖者師弟共可爲永擯事

- 一廿年而脫草鞋三十年於立法曠者其國之僧錄江遂披露一夏一冬可成就乎雖然清衆百箇於無之者急度令分散師學共可爲罪過並學者掛落之裏仁不可用色衣事
- 一五三箇年修行致中絕不憚浮世再企偏歷利賄賂囑託望首頂者背宗門例法條請取掛錫引誘之寺庵於有之者露顯次第仁法曠師共仁可令追罰事
- 一爲末寺背本寺之掟惡逆之僧徒於歷然者永可令罰却並爲善知識魔魅俗家呈露古則未徹之者仁色衣掛落赦免之事且者度本寺經宗旨條開出次第仁可令擯別事
- 一自今以後轉衣望之輩於在之者其國之僧錄江遂披露嗣法師以推舉狀本寺江致登山且又本寺之推舉狀仁而令上落可奉傳 奏事

右條條以上意定置上者到盡未來際不可有違犯若相背族於有之者其國之從僧錄急度可被處罪過者也仍評定如件

寬永六己巳年八月十三日

- 普藏院 快村 印
- 妙高庵 關 徹 印
- 洞川庵 惠 察 印
- 傳法庵 龍 吞 印
- 如意庵 吞 虎 印

列國錄寺宛

●明正天皇寬永七年八月十三日總持寺五院連署ヲ以テ僧錄ノ規定書ヲ發布セリ而シテ其書ハ左ノ如シ

永平寺與公事出入之儀者慶長中兩本寺共振公文之儀仁付而永平寺ヨリ被レ遂ニ穿鑿ニ關東八洲之長老衆剝取候故寬永五年之九月ヨリ次年六月迄江戶於ニ御奉行ニ落居也其砌永平寺祚天和尙者伊勢江流罪大中寺松薫長老者越後國江流罪也  
右諸國之僧錄所關東之兩寺當山五院之以評定相極所歷然也自今以後亂僧錄申問敷者也

寬永七年八月十三日

普藏院 盧 龍 花 押



妙高庵 關 徹 花押  
 洞川庵 惠 察 花押  
 傳法庵 龍 香 花押  
 如意庵 香 虎 花押

●後光明天皇正保二年四月廿九日總持寺ニ後醍醐天皇ノ繪旨燒失ニ付スル左ノ如ク  
 繼繪ノ勅詔ヲ賜フ

能登國總持禪寺ノ者爲下異ナル干他ニ勅願所上ナルカ被レ補テ曹洞出世ノ道場ニ相ニ並テ南禪第  
 一ノ上利ニ可レ着ニ紫衣法服ヲ之旨雖被レ成ニ 後醍醐院ノ勅裁ニ依テ前年國中ノ兵亂ニ  
 伽藍庫藏僧房悉ノ回祿ノ之時同令ニ燒失之由一宗ノ僧徒悲嘆ノ之奏狀被レ聞食  
 訖且ツ又元和年中守ニ武家ノ之下知可レ任ニ先規ニ者也彌々專ニ正法ノ之興繁ニ宜  
 奉ル禱ニ天下泰平海内安全ヲ者ナリ依テ 天氣ニ執達スル如レ件ノ

正保二年四月廿九日

右 少 辨 判

●同帝承應元年總持寺目代總寧寺英俊和尚永平寺へ入院セリ此年以後關東三刹(總  
 持寺目代)ニ限リ永平寺ニ進住スルノ非謀ヲ巧ミ其額ヲ企テヌリ

●後西院天皇明曆三年總寧寺(總持寺目代)松頼和尚正義ヲ以テ幕府ニ抗シ奇禍ヲ得  
 テ津輕家ニ召預ケラル此年加州侯總持寺ニ寺領四百石ヲ寄附シ同年八月晦日中納言

利常總持寺定書十三箇條ヲ規定シテ之ヲ附與ス

●同帝萬治三年龍穩寺(總持寺目代)御州和尚永平寺へ入院セリ此年幕府ハ關東三刹  
 (總持寺ノ目代)ノ願ヲ容レ永平寺へ進住ヲ許可セリ爾來嘉永年度ニ至ルノ間總持寺  
 ノ目代關東三刹(下總ノ總寧寺下野ノ大中寺武藏ノ龍穩寺)ニ限リ永平寺へ轉住スル  
 トトナリタリ故ニ其他ノ寺院僧侶ハ決シテ永平寺へ住職スルヲ得サリナリ而シ  
 テ轉住セシ人名ハ左ノ如シ

總寧寺ヨリハ永平寺(以下)三十世(光紹)三十三世(徹翁)三十六世(本祝)三十八世  
 (嚴柳)四十世(喝玄)四十八世(靈明)五十二世(宣峰)五十七世(禹隣)五十九世(觀禪)  
 大中寺ヨリハ三十一世(尊海)三十七世(天梁)四十一世(雄禪)四十三世(央元)四十  
 四世(越宗)四十六世(彌山)四十九世(大耕)五十一世(慧源)五十四世(記海)六十世  
 (臥雲)

●龍穩寺ヨリハ廿九世(御州)三十二世(愚門)三十四世(高郁)三十五世(晃全)三十九  
 世(則地)四十二世(江寂)四十五世(湛海)四十七世(董元)五十世(玄透)五十三世  
 (爲海)五十五世(大因)五十六世(雲居)五十八世(道海)等ナリ

●靈元天皇寛文五年七月十一日將軍家綱公諸宗ニ對シ朱印ヲ以テ二箇條ノ定目ナル者  
 ヲ發布セリ

●同帝延寶五年十一月十八日寺社奉行ヨリ關東三刹(總持寺ノ目代)總持寺大中寺龍釋寺ニ對シ自今不和爭論ヲ去リ親睦和融シテ宗務ヲ取扱可シト申渡シ五箇條ノ覺書ヲ下附セリ

●東山天皇貞享四年十月幕府ハ宗門ニ對スル十二箇條ノ定目ナル者ヲ發布セリ

●同帝元祿十六年八月七日肥山梅峰二師ノ願意幕府ノ採理スル所トナリ遂ニ奉行所ニ於テ一師印證ノ復古歸正並ニ伽藍法ノ制度全ク確定セリ而シテ其制定書ハ左ノ如

定

一 嗣法了畢之僧徒經廿五年之臘而有轉衣之望者彌守御定目之旨以嗣法師之推舉狀可致登山若嗣法師有故障者本寺或僧錄遂吟味可令添狀事

一 師資面授一師印證者爲道元禪師之家訓自今以後何之寺院江雖令移住最初傳授之三物一生全可帶之師資相承之外以他人附法停止之事

一 傳法之僧入院之節者其寺院之嗣書除之血脈大事可重授之移轉砌者可附屬于後住當住令遷化者其寺之隱居又者於本寺同門可授受事

右條條永平寺總持寺就願被仰出之向後一宗之僧侶堅可相守此旨若違犯之輩於有之者可爲曲事者也

元祿十六年八月七日

本	阿	永	丹	但	佐	相	豐
彈	飛	伊	後	馬	渡	模	後
正	驥	賀	印	印	印	印	印
印	印	印	印	印	印	印	印

越前 永平寺  
能登 總持寺

古之通兩本寺江被仰渡候間此旨向後堅可相守者也

元祿十六年八月十二日

總持寺 央山 印  
永平寺 石牛 印

副 達

今度兩本寺御召被成被仰渡候御書付寫致與書差越候間被得其意支配下江相觸何モ奉畏候旨來申年七月中迄ニ兩本寺江一通宛可被差越候

列國錄寺宛

總持寺印  
永平寺印

●中御門天皇享保七年四月關東三刹(總持寺ノ目代)寺社奉行ノ開設ヲ經タリト稱シテ特ニ兩寺(永平寺總持寺)ノ家訓ヲ守ル可キ旨ノ觸達ヲ發布セリ

●同帝同曆十四年正月寺社奉行土岐丹波守ヨリ本山職寺格ノ取調ニ對シ關東三刹(總持寺ノ目代)ヨリ左ノ如ク答伸書ヲ提出セリ

大本山 開山道元和尙 無本寺 永平寺

大本山 開山瑩山和尙 無本寺 總持寺

總持寺ハ兩本山ト立來候故無本寺之格式ニ罷有候

●櫻町天皇元文二年十二月寺社奉行牧野越中守紫衣地寺格ノ取調ニ對シ關東三刹(總持寺ノ目代)ヨリ左ノ如ク答伸書ヲ提出セリ

越前國 永平寺  
能登國 總持寺

右兩本寺ハ從古來紫衣地ニ而御座候右兩寺之外只今紫衣地一箇寺モ無御座候以上

●同帝同曆四年四月關東三刹ヨリ寺社奉行松平越中守紫衣地寺格ノ取調ニ對シ左ノ如ク答伸セリ

曹洞一宗之内永平寺總持寺ヲ除其外紫衣着用之寺院並僧正官無御座候

●同帝同曆五年十一月同三刹ヨリ寺社奉行牧野越中守網代乗物寺格ノ取調ニ對シ左ノ如ク答伸セリ

於曹洞一宗者從古來兩本山並關三箇寺遠州可睡齋右六箇寺耳網代御免ニ而用來候以上

●同帝寬保三年同三刹ヨリ寺社奉行本多紀伊守本山職寺格ノ取調ニ對シ左ノ如ク答伸書ヲ提出セリ

元和元乙卯年七月 御朱印諸法度 永平寺

元和元乙卯年七月 御朱印諸法度 總持寺

右兩寺江被下置候其節頂戴仕候現住之人實名

永平寺現住 宗 奕  
總持寺現住 雲 堯

右兩寺江相尋候處右之通相違無御座候以上

●同帝延享年間同三刹ヨリ幕府本末ノ取調ニ對シ左ノ如ク答伸書ヲ提出セリ

一御朱印諸法度

一派本山

越前國

永平寺

一御朱印諸法度

一派本山

能登國

總持寺

●後桃園天皇安永元年十一月廿九日 帝總祖勅賜佛慈禪師登山大和尚ニ特ニ弘徳國明國師ノ徽號ヲ勅諭セラレ

●孝格天皇天明八年二月總持寺ヨリ出世轉衣ノ件ニ付全國一般ノ各僧録所ニ對シ嚴達ヲ發布セリ

●同帝享和二年永平寺五十世玄透和尚小清規ナル者ヲ著ハシ及ヒ古規衣法ヲ製シテ之ヲ宗内一般ニ遵行セシメント企テタルモ遂ニ總持寺及ヒ大乘寺ノ妨訴スル所トナリテ之ヲ果サス僅カニ永平寺山内限リ其着用ヲ許可セラル

●仁孝天皇天保元年永平寺禹隣和尚大阪鳳林寺禪智長先ニ命シテ後嵯峨帝ノ靈輪勅額ヲ膺筆セシム

●孝明天皇嘉永三年關東三刹(總持寺ノ目代)ヨリ其主管者即チ一宗ノ元首ナル大本山大官寺總持寺ニ對スル召封爭論及ヒ永平寺總持寺間ノ三衣淨擾ノ二大葛藤紛起セリ

●同帝安政五年四月六日ニ至リ寺社奉行ノ裁決ヲ以テ三衣事件ハ從前ノ通タル可キ旨申渡サレ永平寺總持寺並ニ關東三刹ハ左ノ如キ證書ヲ呈出セリ

御請書

能登國總持寺ト越前國永平寺關三箇寺衣體其外之儀申爭雙方ヨリ相願候ニ付再應御糾明之上左之通被 仰渡候

一總持寺ヨリ申立候者同寺者雖爲道元國師四世之孫登山國師之開基元亨已來一宗之本山職永平寺者道元初開之道場ニ候へ共宗祖遺訓之趣ヲ以テ山居之地與定置之處至元和度 御朱印御條目被下其已來本山職ニ相成候儀ニ付互格之本山與可心得處總持寺ヲ末派之由申成及迷惑候由申之永平寺關三箇寺ニ而者永平寺者曹洞濫觴之道場宗門根源之爲本山儀勿論ニ有之處總持寺ニ而者永平寺互格之本山之由申立難心得旨申之爲遂御糾明候處永平寺者道元雖爲山居之地曹洞本山之賜 繪旨殊ニ至元和度 御朱印御條目被下日本曹洞下之末派如先規可守當寺之家訓旨之御文段御書藏有之上者曹洞根基之道場一宗之爲本山事歴然也雖然於總持寺ニ開基已來本山之賜 繪旨元和度永平寺同時ニ 御朱印御條目被下御禮席其外 公議御取扱振等凡同等ニ被成下一師印證之 御條目等モ永平寺總持寺互格一樣ニ被下候上者爲本山事無紛然ル上者永平寺三箇寺ニ於テモ右之趣ヲ以取扱候儀不可有異論併於總持寺モ永平寺江對シ不失禮義相互ニ致和融彌宗門興隆ヲ可心懸旨被 仰渡候

一總持寺ニ而袈裟之儀是迄用來候環紐有之九條七條並掛緒者開山笠山二世峨山已來至今製作變動無之旨申之永平寺關三箇寺者右掛緒者五條衣略製之品環紐有之袈裟者南山衣與唱へ右衣體相用候儀者宗祖家訓ニ觸候由申之雙方ヨリ差出候證據類ヲ以テ被爲遂御訛明候得共古今區々ニ而一定不致從來兩様之衣體相用來候儀ニ相聞候間依之追而被及御沙汰候迄者永平寺總持寺ヲ始メ末派之輩ニ至迄右袈裟兩様之内着用之儀者志趣次第是迄之通可相心得旨被 仰渡候

一總持寺ヨリ宗門規定ニ拘ハリ候儀ハ向後永平寺關三箇寺ヨリ遂相談取計其餘總持寺ニ而本末之掟ニ拘ハリ候品及裁許候處不伏ヲ唱へ三箇寺申出候類者總持寺江遂相談取計候様致度旨申之永平寺三箇寺ニ而者宗門之規定等宗祖家訓ニ拘ハリ候儀者總持寺江可及示談筋無之三箇寺ニ而モ一宗之規定並總持寺ニ而本末之掟ニ拘ハリ候 裁許申渡候處不伏ヲ三箇寺江申出候共落着之次第總持寺者勿論永平寺ノ末寺ニ而モ是迄不及相談取計來候旨雖申立總持寺ニ於テモ 御朱印御條目被下本山タル上者向後一宗ニ拘ハリ候大儀者永平寺三箇寺ヨリ總持寺江示談之上可取計且本末之掟ニ拘ハリ候儀同寺ニ而及裁許候處不伏ヲ唱罷出候類猶三箇寺ニ而及吟味候節之取計者延寶度從 御奉行所三箇寺江御渡被置候掟書ニ於諸本寺末寺之僧仕置申付之處彼僧怪之三箇寺江訴之族有之者其本寺江委細相

尋裁許之趣理至極之儀者不取上之若本山非道有之者急度 御奉行所江相違會議之上可有落着事與有之上者右ニ隨可取計儀勿論ニ有之其餘永平寺ニ而申立候廉々者未々相談ヲモ不懸品ニ付先規ニ基遂示談可相究之若難決次第モ御座候ハ、臨其時 御奉行所江相伺可受差圖旨被 仰渡候

右被 仰渡之趣一同承知奉畏候若相背候ハ、御科可被 仰付候仍而御受書如件  
安政五戊午年四月六日 能登國總持寺後見芳春院 連 元

- |                |     |   |
|----------------|-----|---|
| 同寺役局長泉寺眞宗代兼興禪寺 | 焮   | 裔 |
| 同役局代           | 石   | 瑞 |
| 越前國永平寺代        | 大圓寺 | 是 |
| 同寺役者           | 海雲寺 | 常 |
|                | 海晏寺 | 慈 |
| 國府臺            | 總寧寺 | 靈 |
| 越生             | 龍穩寺 | 闍 |
| 富田             | 大中寺 | 無 |
|                |     | 着 |

寺社御奉行所

●同帝萬延元年二月九日寺社奉行ヨリ(安政五年ニ申渡タル裁決書ト全然背馳セル)

定書ナル者ヲ發セリ爲メニ總持寺ハ大ニ其不利ヲ受ケタリ

●同帝文久元年七月廿七日寺社奉行ハ總持寺ノ申立ニ依リ速ニ前年發シタル定書ヲ撤回シテ安政五年ノ裁斷ニ復シテ三衣事件ノ紛擾始メテ治マレリ

明治政府管長ノ統宗(兩本山合併制度及ヒ結果)

●今上天皇明治元年春永平寺臥雲和尚(薩州ノ人)謀願ヲ企ツ同年六月永平寺ニ一宗ノ學寮ヲ設置シ以テ宗門ノ制度ヲ一定スルヲ名トシ私カニ黨與ヲ集ム之ヲ稱シテ碩徳會ト云フ而シテ其議スル所ノ要點總持寺(古來輪番地ノ故ヲ以テナリ)ヲ以テ獨住地ト爲シ永平寺ヲ以テ總本山ト定メ獨住地總持寺ヨリ總本山永平寺ヘ昇住セシムルニ在リ而シテ會員一致之ヲ政府ニ奏請セリ然ルニ政府ハ固ヨリ兩寺ノ因由來歴及ヒ積年ノ紛糾アルヲ知ラス容易ク其奏請ヲ採可シ斷然許可ノ命ヲ下シタリ

●同二年四月各宗ノ同盟會成ルニ當リ總持寺ハ政府ノ前年裁許セラレタル永平寺總本山總持寺ヨリ永平寺ヘ昇住件徹頭徹尾不當ニ付全然不服ナルヲ以テ斷然之レヲ取消ノ下命ヲ請願セラレ度旨ヲ申出タリ而シテ同會ハ總持寺ノ申立ヲ至當ト認定シ速カニ之ヲ容レ同年十二月ヲ以テ之ヲ政府ニ奏シテ昨明治元年六月政府カ永平寺ノ奏請ニ對シテ與ヘタル裁許ノ命令ヲ取消サレントテ更ニ奏請シタルニ政府モ亦之ヲ正當ト認定セラレ速カニ其奏請ヲ裁可シ之レヲ取消ヲ命セラレタリ是ニ於テ兩寺共

舊故ニ復シタリ依テ政府ハ更ニ兩寺ニ對シ自今兩寺未派ノ交互轉住ヲ差止メ兩山別派統轄セシムルノ命令ヲ下シタリ而シテ其書面ハ左ノ如ク(各通)

永平寺

昨夏 御沙汰之筋有之候處今般御取糺之上其寺總持寺共本山如故各其末寺取締違亂無之樣可致旨更ニ被仰出候事 但永永平ハ道元開基之祖山タルヲ以テ席願總持寺ノ上タルヘク候尤兩寺之末派互ニ轉住向後差止候事

太政官

總持寺

昨夏 御沙汰之筋有之候處今般御取糺之上其寺永平寺共本山如故各其末寺取締違亂無之樣可致旨更ニ被仰出候事 但永平寺ハ道元開基之祖山タルヲ以テ席願總持寺ノ上タルヘク且其寺從來輪番住持之處向後碩學智識之者ヲ舉テ住持マラシムヘク候尤兩寺之末派互ニ轉住自今差止候事

太政官

●三年三月餘紛未タ滅セス政府ハ總持寺ノ願ニ依リ東京ニ於テ裁治ヲ賜フ(此年大政府江戸城ニ移ル)同年七月二十五日總持寺ノ輪住ヲ廢セラレ同時ニ 勅許ヲ以テ加州天徳院奕堂和尚獨住第一世トシテ總持寺ニ入院ス同日 今上天皇和尚ニ弘濟慈

德禪師ノ徽號ヲ勅賜セラレ

●同年四月永平寺ニ偏黨ノ僧輩頻リニ總持寺ノ輪任復舊論ヲ唱道シタルモ事竟ニ成ラズシテ止ム轉シテ兩山末派交互轉住論ヲ主張セリ兩本山止ムナク之ヲ許ス此年永平寺臥雲和尚遷化同年十一月環溪和尚(宇治ノ興聖寺)永平寺ニ入院セリ

●同五年二月二十八日太政官第六十三號公布ヲ以テ各本山ヲ除クノ外從來一般寺院ハ拜戴セル僧位僧官ノ永宣旨自今廢セラレタル旨ヲ達セラル同年三月十四日政府ハ特ニ教部省ヲ置キ教導職ヲ設ケ三箇條ノ教憲ヲ發布シテ神官僧侶ノ教導ヲ管督セラル故ヲ以テ寺院住職ノ任免教師等級ノ進退ニ政府ノ權内ニ歸セリ同年三月廿四日政府ハ永平寺總持寺間ニ於ケル葛藤最終ノ裁斷トシテ大藏省戶籍寮ノ名ヲ以テ演達及ヒ其要領五箇條ヲ申渡タリ同省時ノ大輔ハ井上馨氏ナリ是ニ於テ兩寺均シク之ヲ遵奉シ同年四月廿八日ヲ以テ永平寺總持寺間ノ假盟約成ル同年禪三派(曹洞臨濟黃檗)合併成ル同年四月廿日及ヒ廿八日式部寮神官並ニ諸宗ノ本寺(即チ本山)職ヲ召出シ教導職奉命被仰付同年四月廿九日教部省諭達ヲ以テ神佛合併ノ大教院ヲ設ケ全國一途ニ布教ヲナス可キ旨ヲ達セララル同年六月太政官達ヲ以テ肉食妻帯蓄髮等可爲勝手旨ヲ發布セララル同月二日兩本山ヨリ神佛合併布教ノ旨ヲ布達セリ同月五日兩本山ヨリ式部寮ニ於テ 朝命ヲ奉シタルニ依リ五月十日ヨリ說教開始スルニ付各府縣へ近々

巡廻師差向布教ニ着手獎勵可致旨ヲ達セリ同五日兩本山ヨリ宗内限リ肉食妻帯蓄髮等嚴禁ノ旨ヲ布達セリ同年六月十三日太政官ノ名ヲ以テ環溪奕堂兩禪師各六教正ニ補セラレタル旨ヲ達セララル同年八月十七日太政官第二百二十七號公布ヲ以テ宣旨拜戴ノ儀廢止ノ旨ヲ達セララル

●同六年一月十九日太政官第廿三號公布ヲ以テ重テ宣旨拜戴廢止ノ旨ヲ達セララル

●同七年二月十九日臨濟黃檗ノ二宗ト分離シテ曹洞一宗獨立シ以テ宗名ヲ復稱セリ之レト同時ニ永平寺總持寺各別ニ管長ヲ設ケ年番ヲ以テ宗務ヲ執ル同年三月一日東京ニ兩本山(永平寺總持寺以下皆同)出張所ヲ置ク之ヲ曹洞宗務局ト公稱セリ

●同八年一月十三日一宗寺院ノ伽藍法ヲ廢セリ同日總持寺ノ五院ヲ廢シ之ヲ本山總持寺ニ併セ其直末寺院ヲ本山總持寺ノ直末ニ列セシム同年五月三日兩本山合併ノ專門學本校ヲ設ク同月十八日兩本山合併ノ大教院ヲ置ク同年十一月十五日始メテ兩本山末派ノ議會ヲ開キ以テ兩山合併ノ制度ヲ議定セリ

●同九年九月廿六日兩山合併ノ曹洞宗教會條例ナル者ヲ定メタリ

●同十年一月政府ハ教部省ヲ廢シテ其事務ヲ内務省ニ移ス現今ノ社寺局ハ即チ是レナリ

●同十二年二月廿五日癸キニ同五年三月廿八日ヲ以テ假リニ盟約シタル目的ノ履行

トシテ更ニ兩山協和盟約ナル者ヲ締結セリ同年五月三日永平寺承陽殿(開祖堂)燒失セリ同年八月廿四日總持寺獨住第一世 勅特賜 弘濟慈德禪師奕堂大和尚示寂  
同年十一月廿二日永平寺開祖 道元禪師ニ 今上天皇ヨリ承陽大師ノ徽號ヲ勅諭セ  
ル

●同十三年二月廿六日楳仙禪師(最乘寺ヨリ)本山總持寺へ入院(政府ノ特撰)同年五月廿七日楳仙禪師大教正ニ補セラル同年六月四日 今上天皇ヨリ楳仙禪師ニ法雲普蓋禪師ノ徽號ヲ勅賜セラル

●同十四年九月永平寺開祖堂承陽殿再建落成同年十月兩山合併制度上ノ各府縣曹洞宗教導取締會議ヲ開キ兩本山合併制度ノ宗綱ヲ議定セリ此年宗務局ノ名ヲ以テ護法會ト稱スル者ヲ組織シ別ニ規則ヲ編制シ之ヲ一宗ニ發布シ五十萬圓ヲ豫期シテ寄附金ヲ募集セリ

●同十五年四月五日兩本山貫首(住職ノ稱)撰舉投票規約ヲ發布ス同年五月五日兩本山合併制度ノ本末憲章成ル同年八月二十五日兩本山合併制度ノ大學林校舍新築落成ニシテ此年宗務局内別ニ護法會ノ一課ヲ置キ數名ノ職員ヲ設ケ寄附金募集ニ關スル一切ノ事務ヲ管理セシム

●同十六年十月二十四日勅特賜絕學天眞禪師環溪大和尚永平寺ヲ退隱セラル同日雪

鴻和尚(福井ノ孝顯寺ヨリ)入院同年十一月二十日雪鴻和尚大教正ニ補セラル同年十二月十五日 今上天皇雪鴻和尚ニ圓應道鏡禪師ノ徽號ヲ勅賜セラル護法會金ハ此年ヨリ明治廿年ニ至リ滿五箇年ヲ限リ檀家一戸ニ付一口金壹錢(一箇月)ト定メ此口數一口半以上數百數千口ヲ納附セシム此定限ナ下ルナ許サス若シ一寺ノ住職ニシテ其檀家總數ニ於テ此定限ヲ欠キ又ハ其完納ヲ果サルトキハ其住職ハ檀家ニ人望ナク又盡力欠息ト認定シ直チニ相當ノ宗科ニ處シ其重キハ住職ヲ罷免スルノ法ヲ設ケ嚴重ニ之レカ徵集ヲナシメリ又ハ住職人ナシテ檀家ニ代リ辨償納附セシメダリ

●同十七年八月十一日太政官達第十九號ヲ以テ神佛ノ教導職ヲ廢シ寺院住職ノ任免教師等級ノ進退擧ケテ各管長ニ委任セラル同日内務卿ヨリ各管長ニ對シ太政官第十九號達ニ關スル心得ヲ内諭セラル同年十二月七日永平寺六十一世勅特賜絕學天眞禪師環溪大和尚遷化

●同十八年六月十日宗務局甲第九號ヲ以テ宗制ヲ發布ス同月廿日同局甲第十二號ヲ以テ住職資格試驗(第一回延期)ヲ布達セリ同年八月十日永平寺六十二世勅特賜圓應道濫禪師雪鴻大和尚遷化後住撰擧ニ付頗フル波瀾起ル孝山長老ノ檄文瀧谷琢宗ヲ以テ適任者トナシテ投票ノ教唆ヲ行フ元孝山ノ師匠タル大内青巒ハ同長老ニ與フルノ文ヲ書キ檄文或ハ新聞ニ掲ケ琢宗撰擧ノ教唆ヲナセリ結果琢宗當撰セリ同年十一月



六日琢宗和尚永平寺(六十二世トシテ)入院セリ

●同十九年四月十二日宗務局乙第一號ヲ以テ住職資格試験(第二回延期)ヲ達ス同年五月十五日甲第七號ヲ以テ兩本山ノ古風ヲ併セ衣休ヲ一齊ニシテ宗内一般ニ實行スル旨ヲ布達セリ同日甲第八號ヲ以テ住職資格試験派出ノ廢シ各府縣宗務支局教導取締ニ委任(第三回延期)ノ布達ヲ發セリ

●同廿年四月十三日宗務局ハ曹洞扶宗會ノ設立ヲ認可セリ同年七月八日宗務局ハ甲第十號ヲ以テ現住職資格試験法ヲ布達セリ同月十一日甲第十一號ヲ以テ管長ノ慈慮トシテ試験ノ延期(第四回延期)ヲ布達セリ同年八月廿六日永平寺道路改修寄附金募集ニ付兩本山貫首ノ告諭ヲ發布セリ其ノ首文ニ左ノ如キ言アリ

告諭 全國末派寺院僧侶並信徒中

吾カ越本山ハ深山幽谷ニ卓立シテ古昔 高祖承陽大師在世ノ日一箇半箇ヲ接待シ玉ヘル勝躅ヲ憶念スルキハ兒孫ヲシテ欣慕ニ堪ヘサラシム建長五年滅チ京兆ニ示シ遺身舍利ヲ本山ニ留メ給ヒシヨリ茲ニ六百三十五年風化四旁ニ光被シ云々

越本山現住 眞兎斷際禪師 瀧谷琢宗

能本山現住 法雲普蓋禪師 畔上樸仙

●同年十月扶宗會ヨリ住職試験免除願ヲ呈出セリ宗務局ハ之レニ對シ同年十一月五

日ヲ以テ難開屆ニ付代ユルニ規誠九箇條ヲ添附シテ特ニ訓示ヲ與ヘラレタリ(蓋シ名儀ヲ換ヘテ開屆タル者ナリ)同年十一月木田新光上野嶽城外有志寺院廿餘名美濃國岐阜市本覺寺ニ會シ宗弊ノ釐革ヲ盟ヒタリ同月廿五日宗務局甲第十四號ヲ以テ兩本山古來各別ノ法式ヲ改正シ合併齊一ノ新法編纂ヲ布達セリ同年十二月扶宗會首魁者六十餘名ヲ會シ臨時大會ヲ開キ改進方案在家修證義化導方法說教講習等ヲ議定セリ

●同廿一年二月扶宗會ハ正會員ニシテ一寺住職ノ者ニ限リ本年四月ヨリ向フ二箇年間試験猶豫ノ儀ヲ出願セリ而シテ宗務局ハ同月廿四日ヲ以テ之ヲ開屆(第五回延期)タリ同月不二門眉柏日置默仙有澤香庵等ノ有志諸師十餘名大阪顯孝庵ニ會シ一團體ヲ組織シ互ニ宗弊革新ヲ盟ヒタリ同月扶宗會ハ更ニ會員外一般寺院ノ住職モ同年十二月迄住職資格試験延期並ニ同月迄入會ノ寺院ハ正會員同様二箇年間試験猶豫ノ儀併セテ出願セリ而シテ宗務局ハ速カニ之ヲ開屆(第六回延期)タリ同年四月十二日宗務局甲第五號ヲ以テ試験ノ猶豫ヲ普達セリ(第七回延期)同月廿七日扶宗會員八十餘名ヲ三田ノ功運寺ニ會シシメ臨時大會ヲ開キ改進方案五章十七條ノ實行ヲ議決セリ宗務局執事伊藤雲宗水島洞仙ノ兩氏出席シテ之レニ臨監セリ同年八月扶宗會ヨリ宗務局ニ對シ各府縣ノ支局取締招集ヲ出願セリ宗務局ハ之レヲ認可シ與ヘ同年十一

月取締ヲ招集シテ愛宕下青松寺ニ於テ臨時協議會ヲ開キタリ而シテ扶宗會議決ノ改  
進方案並ニ試験猶豫件及ヒ各支局管轄下寺院扶宗會入會ノ取計取締ノ職權ヲ以テ取  
扱ノ件等ヲ議決セリ

●同廿二年三月十八日越本山永平寺貫首(住職ノ稱)瀧谷琢宗禪師ヨリ能本山總持寺  
貫首畔上棟仙禪師ニ對シ宗門改革案上策下策ナル者ヲ提出シ其同意ヲ要求セラレタ  
リ棟仙禪師ハ別ニ意見書九項ヲ認メテ(暗ニ同意シ難キ旨ヲ含メリ)之レカ回答ニ代  
ヘラレタリ同月廿日琢宗禪師ハ重テ一書ヲ寄セ痛ク棟仙禪師ノ意見ヲ駁シ自己カ呈  
出セル改革案中上策ノ有益ニシテ採ル可キヲ辨シテ再考ヲ促シタリ之レト同時ニ進  
陳ト題シ更ニ一書ヲ添ヘテ棟仙禪師ニ致シ一宗一管長論ヲ主張セリ同月廿七日琢宗  
禪師ハ駒込養昌寺ニ出張中ナル棟仙禪師ニ對シ一片ノ信書ヲ贈リ前回ニ於テ呈出シ  
タル上策下策ニ對スル同意ハ強テ求ムルニ非スト雖モ一宗公會ノ原案編製上ノ都合  
アルヲ以テ可否ノ決答アリ度旨ヲ申込タリ同廿九日琢宗禪師ハ更ニ一書ヲ寄セテ前  
信書ニ對スル棟仙禪師ノ決答迅速ヲ催促セリ棟仙禪師ハ止ムナク明治卅三年迄延期  
シ漸次ニ實行スルヲ可トスル旨回答セリ同年六月一日曹洞有志會ナル者勃起シ七十  
餘名大阪ニ會シ宗要十五箇條ヲ議定シ大ニ曹洞扶宗會ニ反對スル運動ヲナセリ同年  
八月十五日兩本山貫首ノ告諭ト同月廿九日宗務局甲第十四號トテ以テ洞上行持規範

(兩本山谷來各別ノ法式ヲ折衷シテ甲乙合併シタル者)ナル者ヲ發布セリ同年十月下  
旬ヨリ同十一月初旬ニ涉リ扶宗會第二回ノ通常大會ヲ開キ素志貫徹ノ爲メ改進方案  
ヲ再議ニ附シテ確定シ以テ同年十一月中開設セラル可キ曹洞宗本末大會議ニ待ツ所  
アリタリ同年十一月有志會モ亦タ再ヒ東京駒込吉祥寺ニ會シ素志貫徹ノ方法ヲ議定  
シ以テ同ク本末ノ大會ニ期スル所アリシナリ同月四日ヨリ同二十五日ニ至二十二日  
間曹洞宗本末議會ヲ開設セリ而シテ同會々期中ニ於テ議員ノ中扶宗會員若クハ之レ  
ニ附屬スル者ヲ以テ更ニ兼中會ナル別動隊ノ一團ヲ組織セリ

●同廿三年一月二十五日兩本山貫首ノ名ヲ以テ告諭ヲ發シ宗制ヲ改良シ世間ノ風潮  
ニ乘シ宗教ノ實益ヲ施サント欲スル旨宗務局甲第四號(一月二十九日)達ニ添附シテ  
普達セリ同年四月一日曹洞宗紀綱寮ナル者ヲ設ク青松寺(東京愛宕町)北野元峰紀綱  
寮司ニ任セラレ曹洞宗基本財産(護法會募集金三十万圓)ノ保管ヲ勤ム同日末派總代  
委員ヲ置ク同年七月三十日曹洞宗教育令ノ改正ヲ發布セリ同年十月四日宗務局ハ甲  
第四十一號達ヲ發シ一宗制度ノ大革新トシテ明治二十四年二月一日ヨリ同年十二月  
ニ至ル滿一年間ニ完成ヲ告ク可キヲ期限シ宗制寺法ノ一大改良ヲ普達セリ同年十二  
月一日宗務局甲第四十七號ヲ以テ曹洞教會修證義ヲ以テ宗教ノ大意ト爲ス旨ヲ普達  
セリ同月二十三日有志會員大辻是三外十七名ヨリ曹洞宗管長ニ對シ九項目ノ懇請書

ナル者ヲ呈出セリ而シテ同管長ハ同月二十七日ヲ以テ書面啓沃ノ旨趣ヲ嘉ミン漸次  
之ヲ履行ス可シトノ指令ヲ與ヘタリ

●同二十四年一月六日永平寺住職瀧谷琢宗禪師宗務局兩本山執事ニ宛テ退休命令書  
ヲ發セリ同八日命令書郵着能本山總持寺貫首現任管長勅特賜法雲普蓋禪師畔上棟仙  
師ハ同月十日ヲ以テ越本山永平寺貫首勅特賜眞晃斷際禪師瀧谷琢宗師ニ宛テ先ツ退  
休回止ノ勸獎書ヲ郵贈シ而シテ棟仙禪師ハ越本山副執事水島洞仙末派總代委員阿都  
太環大溪泰童ノ三名ヲ隨ヒ同日宗務局ヲ發シ同十三日越前國永平寺ニ登ル途路一百  
五十餘里會マ暴風降雪旬日ノ間一齊ヲ見ス積雪路上五尺棟仙禪師ノ老骨(時年古稀  
ヲ過ク)親ラ芒鞋ヲ穿テ寒風ヲ冒カシ深雪ヲ蹈ミ特ニ琢宗禪師ヲ敲キ諄々面語シテ  
以テ退休命令ノ撤回ヲ勸請セラレタリ然ルニ琢宗禪師ハ堅ク執テ動カス頑然決意ヲ  
說テ勸請ニ應セス棟仙禪師ノ老骨涙ヲ拭ヒ空ク山ヲ下リ復々風雪ヲ冒カシテ歸ル同  
月廿一日夜東京出張所ニ着セラシ其翌二十二日末派總代委員ヨリ琢宗禪師ニ對シ退  
休命令二月二十日迄猶豫ノ願書宗務局ヲ經テ呈出シ同時ニ同委員ヨリ全國末派總代  
(議員)ニ宛テ退休命令ニ對スル意見ノ照會狀ヲ發シ同年二月十五日限リ其回答ヲ求  
ムリ宗務局モ亦全國取締ニ對シ同上ノ諮詢書ヲ發シヨリ同月七日宗務局ハ甲第三  
號達ヲ發シテ一寺住職以上ノ者ニ限リ宗制改良ニ對スル意見書ヲ呈出ス可キ旨ヲ普

達セリ同年二月十四日能本山總持寺貫首現任管長勅特賜法雲普蓋禪師畔上棟仙師モ  
亦々退休命令書ヲ發セラレタリ(永平寺琢宗禪師並ニ宗務局兩本山執事末派總代委  
員ヘノ手續ハ琢宗禪師ノ退休命令ト同一ナルヲ以テ之ヲ略ス)同月十六日永平寺琢  
宗禪師ヨリ總持寺貫首現任管長棟仙禪師ニ對シ退休命令撤回ヲ望ムノ書三種ヲ寄セ  
ラレタリ其第二ハ退休ノ理由ニ對スル辨駁第三ハ琢宗九拜トシテ紫雲臺現下ト宛名  
シ以テ退休取消ノ肝要ナル旨ヲ勸告セリ是ニ於テ棟仙禪師ハ退休命令ヲ取消サレタ  
リ同月廿三日取締並ニ總代(議員)カ一月廿二日發ノ諮詢及ヒ照會ニ回答シタル結果  
ノ報告ハ左ノ如シ

永住懇請者 教導取締四十七名 總代議員四十五名 計九十二名

命令遵奉者 取締九名 總代七名 計十六名

同廿三日宗務局ハ局員總代トシテ小松萬宗總代委員ヨリ渡邊禪戒全國末派ノ意思永  
住懇請ニ在リトシテ右ノ答申書ヲ携ヘ再ヒ永平寺ニ赴キ琢宗禪師ニ就キ親ク退休回  
止ノ願ヲ致サシメタルニ此ノ兩名其使節ヲ耻カンメ其齋ヲス所ノ宗務局現任管長棟  
仙禪師ノ命ヲ拋棄シ忽チ變シテ琢宗禪師ノ傳令使ト爲リ同禪師ヨリ管長棟仙禪師ニ  
宛タル三月三日附ノ書面(三月三十一日以内ニ後任撰舉投票命令要求書)ヲ携ヘ三  
月七日歸局復命セリ同年三月十四日現任管長棟仙禪師ハ宗務局執事ニ對シ同日附シ

以テ永平寺貫首琢宗禪師退休命令ノ執行ハ向フ六十日間延期ス可キ旨ヲ命令シ其翌十五日右ノ次第ヲ具シテ永平寺琢宗禪師ニ通知シ更ニ退休断念勸奨第三回ノ特使トシテ宗務局越山副執事水島洞仙ヲ發遣シタルモ亦々重テ容レラレス同廿日空ク歸京復命セリ然ルニ琢宗禪師ハ同三月十五日附テ以テ内務省及ヒ管長宗務局執事能本山總持寺貫首等ニ宛(各通)タル六種ノ書面ヲ齎ラシ石月無外ヲ特使トシテ上京セシメ宗務局ニ就キ退休ノ断行ヲ督促セシメタリ(蓋シ水島石月ノ二氏來往行連ニ發程セシ者ナラン)同月廿四日管長樸仙禪師ハ特ニ郵書ヲ發シ琢宗禪師ノ上京ヲ請求セリ同日宗務局ノ名ヲ以テ全國各支局取締并ニ總代(議員)ノ召集令ヲ發セリ同日兩本山職員ノ上京請求書ヲ發セリ同月二十五日管長樸仙禪師ヨリ内務大臣ニ對シ御勸諭願ト題スル書面ヲ呈出シテ琢宗禪師ノ永住勸諭アリ度旨ヲ願出ラレタリ而シテ其書面ハ却下セラレタリ同月二十七日二十八日ノ兩日間澗谷琢宗一派ノ輩カ函根温泉福住樓ニ密會シ澗谷師ノ意志ヲ承ケ兩山全廢一宗一管長ノ策ヲ決行スル機會ハ實ニ此ノ時ニ在リト爲シ其方法タル表面退休撤回永住請願ヲ名トシ之レカ實行ノ端緒ヲ開ク可シト議ヲ定メ各知ラサル爲メシテ上京シ管長ノ召集ニ應シ特ニ上京シタル体ヲ裝ヒ各歸途ニ就キタリ(函根ヨリ東京ニ歸リシナ云フ)同年四月四日五日ノ兩日ニ於テ琢宗禪師永平寺監院戸澤俊童總持寺監院石川素童支局取締並ニ議員(廿三

名)上京到着セリ同六日取締並ニ議員一同總持寺出張所ニ到リ管長樸仙禪師ニ謁ス禪師一同ニ對シ永平寺貫首琢宗禪師永住懇請ノ道ヲ竭サレンコト切望ズル旨親ク告示セラル一同ハ其旨ヲ承領シ直テ永平寺出張所ニ到リ琢宗禪師ニ謁シ永住懇請ノ意ヲ陳ヘテ退出セリ此日管長樸仙禪師ヨリ再ヒ内務大臣ニ宛テ永平寺琢宗禪師ノ永住勸諭願書ヲ呈出セラレタリ同月七日取締並ニ議員一同樸仙禪師ニ謁シテ曰ク我等一同ニ於テ琢宗禪師ノ退休命令撤回ヲ請願スル方法ニ付大ニ意見アリ格別本山ノ權内ニ障碍ナキヲ信スルモ或ハ事柄ノ次第ニ依リ其權内ニ立入ルモ願クハ罷責ナキヲ請フト陳述シテ一同退出セリ同月八日取締並ニ議員廿二名ノ連署ヲ以テ(越山貫首御退董命令御撤回請願ノ儀ニ付建言)ト題スル書面並ニ其(副伸)ト名クル書ヲ時ノ管長畔上樸仙禪師ニ宛テ之ヲ呈出セリ而シテ其要旨ハ從來ノ交番管長制ヲ改メテ一管長ト爲サントス而シテ之レカ成功ヲ奏スルハ一ニ琢宗禪師ノ力ニ依ラヌンハ能ハス故ニ永住ヲ懇請シ退休ノ撤回ヲ求ムト云フニ在リ此書ヲ呈出スルト同時ニ口頭ヲ以テ要求シテ曰ク管長ヨリ願者一同御召集ノ際ハ前以テ御通牒ヲ願ヒタメト陳述シテ退出セリ同月九日早天管長ヨリ取締並ニ議員ノ各宿所ニ向ケテ即時出頭ノ召集令ヲ發セラレタリ然ルニ取締並ニ議員ハ何レモ皆ナ他出不在ト稱シテ管長ノ召集ニ應セサリシコソ不思議ナリトハ當時ノ評判ナリ同月十日永平寺貫首琢宗禪師ハ彼

ノ建言書ニ對シ宗門將來ノ平和ニ於テ益ナキ旨ヲ申告セラレタリ同月十二日建言者一同ヨリ書中ノ訂正ト有志會員ノ懇請書ニ對スル管長ノ指令取消ノ忠告書トヲ呈出セリ同月十三日建言者一同ヨリ曹洞宗臨時諮問開設ノ儀ヲ中立同時ニ永平寺琢宗禪師ノ退休ヲ五月十五日迄延期セラレントヲ願出タリ此日琢宗禪師ハ四月三十日限リ斷然退休ノ旨管長棟仙禪師ニ對シ届出タリ同時ニ能本山總持寺貫首ノ資格ナル棟仙禪師ニ宛右三十日限リ退休ノ旨通牒セラレタリ同月十四日始メテ表面公式上ニ於テ管長及ヒ兩本山（即チ永平寺總持寺）間ノ交渉トナリ照會往復ノ結果互ニ書面ヲ以テ建言ノ可否取捨ノ意見ヲ質議スルトト確定セリ同月十五日時ノ管長ヨリ永平寺貫首琢宗禪師總持寺貫首棟仙禪師ニ對シ（各通建言採否ニ係ル意見ノ照會書ヲ發セラレタリ同日琢宗禪師ヨリハ先ツ以テ能本山總持寺ノ意見ヲ問ハレタシトノ答伸ヲナシタリ其追伸ニ本件ハ退休ニ於テ何タル關係ナキ旨ヲ添ヘタリ同日棟仙禪師ハ總持寺ニ於テ建言不採ノ旨ヲ答伸セリ同日管長ハ重テ永平寺ノ意見ヲ照會シタルニ琢宗禪師ハ總持寺ノ意見ニ同意ノ旨ヲ答伸セリ同月廿三日早天ヨリ宗務局執事水島洞仙立案者トナリ兩本山（永平寺總持寺）及ヒ管長並ニ建言者ニ對スル手續ヲ協議シ左ノ事項ヲ議定セリ

第一總持寺ヨリ管長ニ上申スルヲ 第二管長ヨリ永平寺へ照會スルヲ 第三永平

寺ヨリ管長へ答申スルヲ 第四其結果ヲ建言者へ回示スルヲ

同月廿三日改メテ總持寺ヨリ管長ニ宛テ同意書ヲ呈出セリ其要旨ハ嘗テ明治廿二年永平寺貫首琢宗禪師ヨリ同意ヲ要求セラレタル議案ハ當時時機ノ未ダ至ラサルヲ以テ延期ノ旨回答シ置キタリシカ今日ニ至テハ時機全ク熟セリト認定セリ依テ之レニ同意ヲ表シ茲ニ這回ノ建言ヲ採納シ本年改良ス可キ宗制ノ基礎ニ供シテ可ナリト云フヒ在リ依テ同日管長ヨリ直チニ之ヲ永平寺ニ照會シタリ永平寺貫首琢宗禪師ハ同日ヲ以テ管長ニ對シ總持寺ノ意見ニ同意ヲ表シテ毫モ異議ナキ旨ノ回答書ヲ呈出セリ同日管長ヨリ建言者ニ對シ建言ハ兩本山（永平寺總持寺）ノ採容スル所ト爲リタルヲ以テ本管長ニ於テモ之ヲ採用スルニ確定セリ依テ本年臨時議會ヲ召集シ可否ヲ公論ニ決ス可シ而シテ琢宗禪師永平寺退休ハ本月三十日限リト確定セリ此旨回示ストノ書ヲ下附セラレタリ是ニ於テ宗務局ハ同月二十四日附テ以テ甲第八號ヲ發シテ建言採容ノ旨ヲ普達セリ而シテ管長ハ同月廿四日會議規程第五條ヲ摘用シ明治廿四年五月廿五日ヨリ三日間未派總代議員ヲ徵集シ臨時諮問會ヲ開設スルヲ命スル旨ノ告諭ヲ發セリ之レト同時ニ宗務局ハ甲第九號十號ヲ發シ麻布大學林ニ於テ臨時諮問會ヲ開設スル旨普達セリ同年五月廿四日議員上京宗務局ニ出頭シ到着ノ届ヲ爲シタリ同月廿五日附懸名ヲ以テ曹洞宗革命策十二箇條ノ秘密書ヲ發布シタル者アリ

其大意ハ兩本山（永平寺總持寺）ヲ全廢シテ東京ニ一ノ新本山ヲ創設シ之ヲ血統相續ト爲シ以テ皇族若クハ華族ト結婚シ身華族ト爲ラントスルニ在リ（眞宗門跡ノ比ニ倣ハントスル者ナリ甚々卑ム可ク惡ム可キ目的ナリ）而シテ此ノ目的ヲ果タス迄ノ運動費ニ充ツル爲メ護法會金ヲ募集セシメテ詳記セリ即是レ函根密會ノ結果ナリ其綱目ハ左ノ如シ（本文ハ長編一冊子ナリ茲ニ省略ス）

- 第一 兩本山全廢
- 第二 一本山新設
- 第三 右二項ニ係ル運動費基本財産消費（護法會金五十萬圓）
- 第四 新本山建築及ヒ位置
- 第五 兩山ノ舊跡ヲ以テ僧堂トナスノ法
- 第六 新本山ノ制度及ヒ永續法
- 第七 三法幢地及ヒ末派本末格地本末ノ全廢
- 第八 代議宗制及ヒ本山末派ノ資格關係全廢
- 第九 管長ノ責任及ヒ宗務局
- 第十 議員ノ責任及ヒ宗務支局
- 第十一 僧堂ノ制度及ヒ永續法

第十二 學林ノ制度及ヒ永續法

以上

同廿五日株仙禪師ハ總持寺兼永平寺住職ノ名ヲ以テ臨時諮問會ニ對シテ諭示ヲ發シ既往宗制ノ弊害ト自今改良セサル可ラサル旨トヲ告ケラレタリ同廿六七ノ三日間ニ於テ各府縣ヨリ寺院ノ住職並ニ檀家數百名特ニ上京シ傍聽ノ儀ヲ願出タリ其意此ノ諮問會ハ宗門興廢ノ岐カル、所ニシテ扶宗會兼中會カ瀧谷琢宗師ノ使嗾ヲ受ケ隨年ノ間陰謀密計遠昔ヨリ畫策セル結果タルヲ認定シタレハ末派檀信ハ飽迄不同意ナリ依テ諮問會ノ議決ヲ許ササルナリ故ニ此會ノ通過完結ヲ望マスト云フニ在リ（其實宗務局員永平寺住職並各縣取締及ヒ議員ハ八九分皆十共謀同意者ニシテ即チ扶宗會員タリ兼中會員タリ函根密會員タレハ此ノ會ノ原案ハ無論大多數ノ原案賛成ヲ以テ可決セラル、ヲ認定シタレハナリ）結局傍聽ヲ許シニ決シタルヲ以テ結果議場ノ紛擾トナリ隨テ傍聽者一般ノ憤激スル所トナリ終ニ原案ヲ配附シタル儘本議ニ入ルヲ得スシテ三日ノ期間ヲ經過セリ止ムナク宗務局ハ尙ホ一日ノ延期ヲ達シ其調和議定ヲ謀リタルモ事遂ニ未決ニシテ了ハル同月廿八日管長ノ名ヲ以テ諮問會ニ對シ閉會ヲ命シタリ（會期已ニ滿シ依テ閉會ヲ命ストノ達令ハ是レナリ）同廿八日宗務局ハ永平寺後董撰舉親囑候補者（琢宗禪師ノ自撰スル所）三十名ノ姓名ヲ添附シ甲第十

三號ヲ以テ同年七月十五日限り投票ヲ取纏メ送達ス可キ旨全國各支局取締ニ普達セリ  
 同月廿九日服部元良總持寺出張所執事ノ職ヲ辞セリ依テ同日貫首棟仙禪師ハ石川  
 素童森田悟由星見天海ノ三名ヲ以テ後任執事ノ候補者ト爲シ其指名書ヲ未派總代委  
 員(曹洞議會ノ常置員五名)ニ下附シ其一名ヲ撰定セシム(宗規ノ規定)同年六月  
 六日總代委員阿部太環吉川義道皆川祖隆渡邊禪戒ノ四名ハ星見天海ヲ撰定シテ上申  
 書ヲ呈出セリ然ルニ獨リ大溪泰童ハ議協ハス寧ロ貫首ノ特撰ニ一任スト云テ上申書  
 ニ連署セサリシナリ同月八日五名ノ委員ハ忽チ前意ヲ變シ(密計ノ成ラサルヲ察シ  
 タリシナリ)後任執事ノ後任撰定上申書撤回チ申請セリ其口實トスル所彼ノ候補者  
 三名ハ委員ニ於テ不可トスルハ勿論大溪泰童ハ貫首ノ特撰ニ一任スト云テ上申書ニ  
 連署セサリシト云フニ在リ同月九日總持寺貫首棟仙禪師ハ右委員ノ撰定ヲ取消シ  
 特ニ監院石川素童ニ命シ總持寺東京出張所臨時執事事務取扱兼務ヲ勤メシム同月三  
 十日右ノ委員等ハ一篇ノ上申書ヲ呈シテ痛ク總持寺貫首畔上棟仙禪師ノ措置ヲ難  
 詰シタリ管長畔上棟仙禪師會々教務上越中行アルニ當リ管長代理ヲ北野元峰ニ命シ  
 マルニ右ノ委員等ハ大ニ之ヲ不服トナシ以テ四箇ノ難目ヲ列ネ一篇ノ質疑書ヲ裁シ  
 テ之ヲ管長ニ呈出セシ者ハ即チ是レナリ同月三十一日永平寺後任撰舉投票開緘審  
 査ニ付管長ノ特命シタル(投票規約ニ規定スル所ニシテ候補者中ヨリ二名各府縣教

導取締ノ中ヨリ七名)立會員一同上京シテ宗務局ニ出頭シ到着ノ届出チナシタリ  
 同日午後永平寺出張所ニ於テ右ノ上京員並ニ宗務局員及ヒ投票審査場係員一同チ召  
 集シ審査ニ關スル申合チ爲ス可キ旨ノ報告チ口報シ該心得書(宗務局ヨリ發布)ナ  
 ル者チ各員ニ配附セリ同年八月一日右投票ノ開緘審査ニ着手セリ同月八日開票審査  
 場(規程ニナキ違規)ノ立會者阿部太環等ノ五名(總代議員ノ委員)規程ニ依テ召  
 集セラレタル立會者(取締七名ノ中)三好育道佐藤實英水野禪法ノ三名ト聯合シテ  
 表面ヨリ攻メ宗務局執事及ヒ同局詰員等ハ裡面ヨリ相應ニ互ニ心ヲ協ハセ初日ヨリ  
 (其實諮問會ノ時ヨリ秘密ニ相約シタル者ナラン)充分ニ準備計畫ヲナシ置キ此日  
 ナ以テ先ツ第一ニ總持寺監院石川素童氏ノ審査員タルチ不服トナシ屢總持寺貫首現  
 任管長(即チ此時ノ撰舉長)開緘場監臨棟仙禪師ニ逼リ素童監院ノ退場命令ヲ要求  
 シテ止マス依テ止ムナク素童監院ニ退場ヲ命シタリ同月廿四日(一日ヨリ廿三日ニ至  
 ル間ノ波瀾紛擾ハ略シテ記セス)前夜ヨリ赤阪稻荷堂(永平寺執事ノ宿所)ニ於テ  
 密議セリ其議決ハ這回ノ投票審査ハ五三日程ニシテ結了セント期シタルモ如何セン  
 西有稷山師ノ投票勝數二千以上ニ達セリ之レニ反シテ森田悟由師ノ投票敗數二千五  
 百以上ナリ此勝敗點ヲ顛覆シテ目的タル森田悟由チ以テ當撰ト爲サントスルニハ勢  
 ヒ西有師ノ投票ノ中三千票内外無効ニ歸セシムルノ術ヲ講セサル可ラス苟モ之ヲ實

行スルニハ審査場全員一致スルニ非レハ能ハサルナリ老朽事理ニ通セス氣力難ニ堪ヘサルノ輩ハ假令ヒ幾分ノ不服アルモ甚ク制シ易シ故ニ結了ノ上審査表ニ連署捺印セシムルモ亦タ難カラズ獨リ制シ難ク又連署捺印セシムル能ハサル者ハ彼ノ菊池大仙ナリ然レハ先ツ急ニ菊池大仙ヲ審査場ヨリ退斥セサル可ラスト内決セリ是ニ於テ此日早天突然宗務局ノ名ヲ以テ菊池大仙ニ宛テ(同人ノ宿所烏森町筑波館)本日都合アリ審査場ノ立會ヲ停止スル旨ノ書面ヲ發セリ然ルニ同人ハ早天既ニ審査場ニ出席セリ(局使ト行違ヒニナリタリ)同月廿五日早天菊池大仙ハ審査場ニ出席セリ然ルニ宗務局ハ同人ノ既ニ宿所ニ不在ナルヲ機トシ特ニ使ヲ馳セ立會差免狀ナル者ヲ宿所館主ニ傳致セリ而メ宗務局執事ハ審査場ヨリ菊池大仙ヲ召喚シ總持寺ニ於テ立會差免執行ノ旨ヲ申渡タリ依テ同人ハ直チニ理由ヲ具シ(立會差免甘受シ難キニ付御届)ト題スル書面ヲ宗務局ニ差出レタリ同月廿六日宗務局ハ右届ヲ却下セリ依テ同人ハ更ニ(差免狀奉還届)ナル書面ヲ添附シ該差免狀ヲ宗務局ニ返戻シ同時ニ内務省ニ出頭シ宗務局ノ不當處分取消及ヒ投票並ニ開スル一切ノ書類蓋押審査場停止封鎖ノ儀ヲ出願タリ(以上ノ顛末總テノ詳事ハ當時ノ新聞雜誌又ハ印刷物ニ出テタルヲ以テ此ニ畧ス)而シテ此ノ非行ヲ爲シタル審査場同意者連ハ目的ヲ果タシタリト爲シテ此日直チニ表ヲ製シ森田悟由ヲ以テ當撰人ト定メ審査員立會員

(同意者ノミ)證明ノ連署捺印セリ然ルニ日置默仙(候補者中ヨリ特撰セラレタル立會員)比奈地恒仙大安麟乘福永毫千(取締中ヨリ特撰セラレタル立會員)ノ四氏ハ初日ヨリ今日ニ至ル廿六日間ニ於ケル審査ハ實ニ不正不當俗人ニモ有ル可ラサル非行ナルヲ惡ミ大ニ之ヲ憤リ審査表調印ノ要求ヲ拒テ應セサリシトナリ是ニ於テ宗務局員並ニ審査立會員(同意者ノミ)等ハ協議(管テノ密約)ヲ以テ各手分ケテ爲シ右ノ四氏ヲ情説若クハ脅迫シテ連署捺印ヲ強要セリ(彼ノ調印取消訴訟ハ即チ是レナリ)中ニ就テ日置氏ノ如キハ當時眼疾ニ罹リ大學病院入院中ニシテ眼球切解ノ治療ヲ受得タル際ナルモ本山住職ノ投票ハ一宗ノ大事ナルヲ以テ力メテ病院ヨリ(距離一里半強)日勤シテ開城ノ立會ヲ務メタル者ナリ又比奈地氏ノ如キハ硬骨殿直ノ人ナルモ如何セン七十餘歳ノ老躬ナリ故チ以テ此二人ハ遂ニ強脅ニ敵セス捺印捺用セラレタリ而シテ他ノ二人ハ軟弱放任ノ性質ナルヲ以テ容易ニ強脅ニ畏怖シ擬リニ署名捺印セリ審査表調印中ノ尤モ不正ナルハ福山默童ノ印ナリトス同人ハ永平寺ノ執事ニシテ投票審査ニハ終始總テ出席セサル者ニシテ又該件ニハ毫モ與カラザリシナリ而シテ公然該表ニ署名シ之レカ證明ヲ爲タルコソ怪事ナリ必竟西有師ノ當撰ヲ忌斥スルノ要ハ他ナシ師ノ嚴令潔白敢爲果斷ニシテ永平寺ニ住職タラシメハ到底不正輩ノ意ノ如クナラス結局總持寺ヲ倒貶シテ末派ノ列ニ入レ



永平寺獨リ一宗特別ノ總本山ト爲スノ非望宿志ヲ果タスノ一大妨害タレハナリ之レニ反シテ森田悟由ヲ以テ當撰人ト爲ス時ハ目的ヲ達スルニ甚タ便利ナレハナリ何ントナレハ同人ハ性質魯鈍無學無識ニシテ事理ニ迂濶即チ一種ノ呆案山言フ儘ニ隨ヒ聞ク儘ニ行ヒ唯々命隨フノ人形的動物ナレハナリ既ニ然リ而シテ此ノ當撰ヲ不正ニ確定セリ非望ノ便利辛フシテ得タリ更ニ進ンテ第二ノ便利ヲ謀ラントスル者アリテ存ス是レ他ナシ既往宗門ノ紛亂一ニ宗務局ノ失政ニ在リ此ノ失政ハ又一ニ總持寺現任當任管長棟仙禪師ノ失當ニ在リト爲シ總持寺ノ責ヲ棟仙禪師ニ歸セシメ之ヲ攻具ト爲シ同禪師ヲ退隱セシメ以テ第二ニ總持寺後任撰舉ノ投票ヲ執行シ亦タ同ク慣用手段ヲ以テ木人土偶己レ等ノ指呼左右隨意ノ呆案的人物ヲ撰舉スルニ在リ苟モ事全ク此ニ至ラハ永平寺總持寺ノ住職ハ好一對ノ案山子ニシテ宗門百般ノ事ハ擧ケテ宗務局員若クハ非望同意者ノ行爲ニ一任セン此ノ時ハ即チ非望目的ヲ達スルノ時ナリ此ノ時ニ當リ彼等ノ第一策タル總持寺倒廢永平寺獨一本山ヲ企テントス而シテ事若シ成ラスンハ第二策トシテ兩本山全廢新一本山創設ヲ主張セントスル者ナリ曹洞宗投票ノ紛擾一ニ此ニ在リ且ツ其レ同宗三百年ノ紛糾重累シテ今日ノ最極點ニ達シタルモ亦タ此ニ外ナラス而シテ其目的其非行ハ公然表面ニ顯ハレス(時々機密ノ露洩セシマアルハ奇數ナリ)是ヲ以テ互ニ陰然ノ間ニ於テ一方ハ進撃シテ攻陷ニ盡

シ他ノ一方ハ防禦ニ汲々シテ餘裕ナシ故ニ近時ノ曹洞宗ハ甲ハ守舊宗制(疾クニ宗制ノ弊害ヲ唱ヒテ既ニ宗制改良ノ局達ヲ以テ公然達シタルニモ拘ハラズ)ナリニシ乙ハ宗制ノ明文ニ據テ(其實舊宗制ニ懲リ將來ノ禍害ヲ恐レ)改定復古ヲ公唱スルニ至レリ蓋シ古來兩箇ノ本山(是レ中古ノ事ニシテ中古以前ハ全ク總持寺ノミ獨一本山トシテ末派ヲ統轄シタル者ナリ永平寺ハ開祖道元禪師ノ遺訓ヲ守リ山居ノ地トシテ單ニ雲水ヲ教育センノミ本山ヲラントノ希望ハナキ者ナリ)トシテ今日ニ至リタル者ナレハ兩箇ハ兩箇トシテ各各別別ニ一家ヲ立テ各自巳ノ末派ヲ限リ統治セハ將來永ク葛藤紛擾ヲ見ルノ患ナカラシ明治二年太政官既ニ之レカ裁定ヲ與ヘ置キシナリ

●同廿五年三月十九日曹洞宗管長ハ宗制第二號第二條ニ依リ兩山分離從來ノ組織全廢各本山各別ニ改定制度ヲ設ケ各其末派ヲ統治ス可キ旨ヲ布達セリ同日能本山總持寺貫首ハ右ノ管長達ヲ承ケテ自己ノ末派ニ對シ能本山ノ別派獨立シテ自今末派ヲ統治スル旨ヲ布達セリ

編年 曹洞史 略完  
摘要

換跋言

越山貫首御退董命令御撤回請願の儀に付建言

一從來の交番管長の制を改めて一管長となし闔宗の統治者となす 但兩本山の權限資格は毫も等差なき事  
一本宗管長の進退規則を定むる事

明治廿四年四月八日 生駒圓之高岡白鳳工藤雄山滿岡慈舟古  
知知常織田雪巖近藤良瑞小松萬宗三好育道吉川義道山田孝道  
阿部太環渡邊禪戒面溪愚道高倉一音大友堅孝佐藤實英皆川祖  
隆鷲嶽梅仙笠間龍跳木村禪隆大溪泰童(以上廿二名連署捺印)

曹洞宗管長 畔上 榎 仙 殿

現任管長より永平寺貫首に對する照回狀

明治廿四年四月八日愛知縣第一號支局取締生駒圓之以下廿二名  
より呈出せる建言及明治廿二年三月貴本山より提示せられたる

議案に對し更に能本山より別紙稟請相成候條貴本山に於ても御同意相成度此段及御照會候也

明治廿四年四月廿三日

現任管長畔上樸仙(印)

大本山永平寺住職瀧谷琢宗殿

永平寺貫首より現任管長に對する回答狀

明治廿四年四月八日愛知縣第一號支局取締生駒圓之以下廿二名より呈出せる建言に付過る十五日再度御照會に依り其都度回答に及置候處今般能本山貫首前議を翻し改めて廿二名の建言を採納するに如くなると御考定有之就ては永平寺現董に於て同意を表す可き旨明治廿四年四月廿三日附を以て御照會の趣致了承候將來の宗是御認定の御見込御尤に候條能本山貫首に同意を表し異議無之候此段御回答に及候也

明治廿四年四月廿三日

大本山永平寺住職瀧谷琢宗(印)

曹洞宗管長畔上樸仙殿

管長より建言者に對する回示書

愛知縣第一號支局取締兼議員

生駒圓之外廿一名

明治廿四年四月八日附を以て呈出相成候建言兩本山に於て協議を遂げ候處越本山貫首退董命令は到底撤回せられず本月三十日を以て斷然退休の事に確定相成候而して建言の要旨たる一宗一管長の考案は目下採て以て施行し可然時機と認め候に付該考案を骨目とし更に潤飾補成として一篇の議案となし臨時議會の議に附し以て可否を公論に決す可き事に協定相成候此旨回示す

明治廿四年四月廿三日

管長畔上樸仙

臨時諮問會開設管長の告諭

曹洞宗會議道場規程第五條を適用し明治廿四年五月廿五日より三日間末派總代議員を曹洞宗務局に徵集し臨時諮問會を開設することを命ず

明治廿四年四月廿四日

曹洞宗管長畔上樸仙

甲第九號

曹洞宗末派總代議員

管長猥下より如上の告諭有之候條總代議員は來る五月廿四日着京廿五日午前八時一同管長猥下に相見の拜了て議場に入り曹洞宗會議道場細則第一條第一項第二項を執行し午後第三條第一項を執行す廿六日廿七日諮問原案に就き總体逐條確定議を終へ廿八日隨意歸國せしむ但議事の都合に依り臨時會期の延縮を稟請すと雖とも諮問原案外の事項は一切討議するを得せしめず  
右普達候事

明治廿四年四月廿四日

曹洞宗務局

甲第十號

全國末派寺院

明治廿四年五月廿五日より三日間臨時諮問會開設相成候此旨普達候事

明治廿四年四月廿四日

曹洞宗務局

臨時諮問會原案

- 第一條 曹洞宗管長は全國末派の公撰とす
- 第二條 曹洞宗管長は兩本山住職を併掌す
- 第三條 曹洞宗管長上任年限は公撰確定内務大臣認可の日より滿七年とす但公撰投票の多同に據り再ひ上任するを得
- 第四條 曹洞宗管長は上任年間舊住職地に監寺を置き滿期に至り歸任するを得

第五條 曹洞宗管長公撰規則は曹洞宗務局之を編製し曹洞宗議會の議に附す

閉場命令

會期已に滿つ依て閉會を命す

明治廿四年五月廿八日

曹洞宗臨時諮問會

曹洞宗管長畔上樸仙

18  
448

明治二十七年六月廿一日印刷  
明治二十七年六月廿四日發行

編輯者兼  
發行者

宮城縣柴田郡大河原町百七番地平民  
菊池大仙

東京市芝區芝公園第八號地二番寄留

印刷者

田中正藏

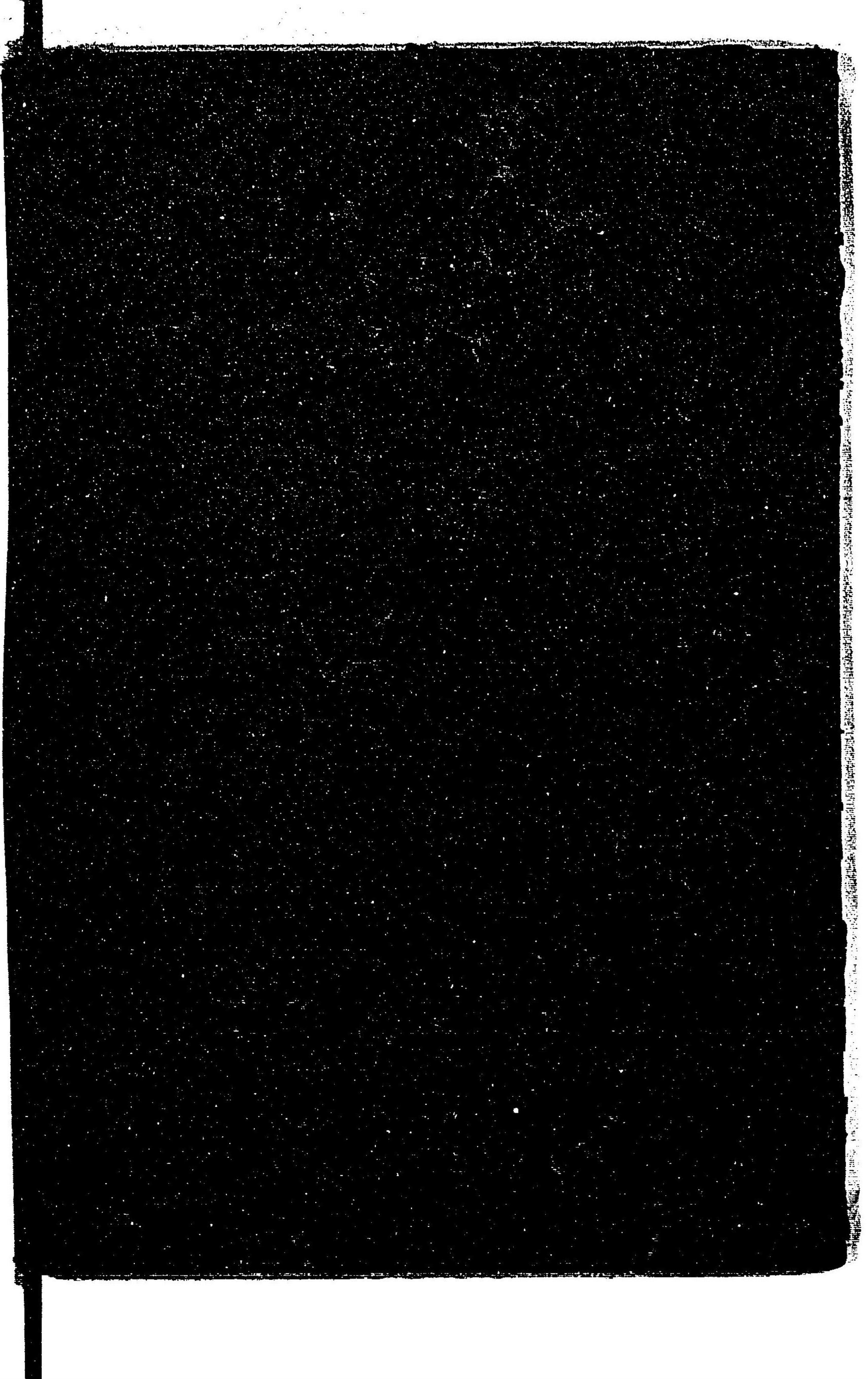
東京市京橋區山城町六番地

發行所

如 是 社

東京市芝區芝公園第八號地二番

18
448





18  
448

019703-000-0

18-448

曹洞史略

菊池 大仙/編

M27.6

ABG-0500



